

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（230）

伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

な か ぐ み い せ き
中組遺跡

（大島郡天城町）

2025年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴い、令和5年度に実施した中組遺跡の発掘調査の記録です。

中組遺跡は、大島郡天城町兼久に所在し、中世から近世・近代にかけての遺構や遺物が発見されました。

遺構は、近世以降と思われる溝状遺構や柱穴などが発見されました。また、近現代の石垣基礎も検出され、この地域の土地利用を研究する上で貴重な資料になることも期待されます。

遺物では、中世の青磁やカムイヤキなども出土し、古くから周辺で生活していたことを示す手がかりとなってくるものと思われます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの人々に活用され、埋蔵文化財に関する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただきました地域住民の皆様をはじめ、天城町教育委員会、県土木部道路建設課をはじめ、多くの関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和7年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 村 和 美

報告書抄録

ふ り が な	なかぐみ いせき							
書 名	中組遺跡							
副 書 名	伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 2 3 0 集							
編 集 者 名	上浦麻矢 星野清 黒川忠広							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 Tel 0995 - 48 - 5811							
発 行 年 月 日	2025 年 3 月							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかぐみいせき 中 組 遺 跡	か ー ぎ し ま け ん 鹿児島県 大島郡 天城町 兼久 字中組	46531	531-30	27° 47′ 54″	128° 54′ 12″	2023. 12. 1 ～ 2024. 2 . 27	300	伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴う記録保存調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中組遺跡	散布地	中世			青磁, カムイヤキ, 中国・東南アジア産陶磁器			
		近世以降	溝状遺構 1 条 土坑 5 基 柱穴 11 基 石垣 1 基		肥前系陶磁器, 薩摩焼 沖縄施釉・無釉陶器			
遺跡の概要	中組遺跡では、中世から近世・近代にかけての遺構・遺物が発見された。遺構は、近世以降と思われる溝状遺構 1 条や土坑 5 基, 柱穴 11 基などが、また、近現代の石垣基礎も検出された。これらのうち隣接する 4 基の土坑は建物跡になる可能性もある。 遺物は、溝状遺構内を中心に中世の青磁やカムイヤキを含む近世陶磁器が出土したが、近代以降を含む。これらのうち、食膳具は肥前系と薩摩焼, 貯蔵具やすり鉢では沖縄産陶磁器が一定数認められた。一括性には欠けるが、近世以降の南島における陶磁器の流通に関して知見を得ることが出来た。							



中組遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴う中組遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 中組遺跡は、鹿児島県大島郡天城町兼久字中組に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課（大島支庁徳之島事務所）から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、令和5（2023）年12月1日から令和6（2024）年2月27日まで鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 整理作業・報告書作成作業は、令和6年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施し報告書を刊行した。
- 6 発掘調査における遺構等の実測図作成は、担当職員の指示のもと、一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 7 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、空中写真の撮影は、九州電力株式会社鹿児島支店九州ドローンサービスが行った。
- 8 出土土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て行った。
- 9 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、黒川が行った。
- 10 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 11 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第II系を基準としている。
- 12 使用した土色は『新版標準土色帳』（2013 農林水産省 農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。
- 13 本書の執筆担当は、以下のとおりである。
 - 第1章 星野 清
 - 第2章 星野 清
 - 第3章 星野 清
 - 第4章 上浦麻矢・黒川忠広
 - 第5章 上浦麻矢・黒川忠広
- 14 本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記で用いた遺跡記号は「NG」である。

目 次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の体制と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と層序	7
第1節 調査の方法	7
第2節 整理作業の方法	7
第3節 層序	7
第4章 調査の成果	10
第1節 遺構の調査	10
第2節 遺物	15
第5章 調査のまとめ	23
第1節 遺構	23
第2節 遺物	23
図版	25

挿図目次

第1図 周辺遺跡地図	5
第2図 周辺地形図	8
第3図 土層断面図	9
第4図 遺構配置図	11
第5図 溝状遺構実測図	12
第6図 土坑	13
第7図 柱穴	14
第8図 石垣	15
第9図 遺構内遺物1	16
第10図 遺構内遺物2	17
第11図 遺構内遺物3	18
第12図 遺構内遺物4	19
第13図 包含層・カクラン中の遺物	20

表目次

表 1	奄美・沖縄諸島の編年	3
表 2	周辺遺跡一覧表	6
表 3	町教委B調査区の層位	7
表 4	遺構一覧表	15
表 5	遺物観察表（1）	21
表 6	遺物観察表（2）	22
表 7	遺物組成表	24

図版目次

図版 1	①空撮（東から西を見る） ②空撮（西から東を見る）	25
図版 2	①空撮（調査区全景） ②南側完掘状況 ③北側完掘状況	26
図版 3	①調査区南側土層断面 ②調査区西側土層断面	27
図版 4	①作業風景 1 ②作業風景 2 ③作業風景 3 ④作業風景 4	28
図版 5	①石垣検出状況 1 ②石垣検出状況 2 ③石垣検出状況 3 ④溝状遺構調査状況 1 ⑤溝状遺構調査状況 2 ⑥溝状遺構埋土状況	29
図版 6	① 1 号土坑完掘状況 ② 2 号土坑半裁状況 ③ 3 号土坑半裁状況 ④ 4 号土坑完掘状況 ⑤ 2・4・5 号土坑完掘状況	30
図版 7	遺物 1	31
図版 8	遺物 2	32
図版 9	遺物 3	33
図版 10	遺物 4	34

第 1 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県土木部道路建設課は、大島郡天城町兼久地内において伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業を計画し、事業予定地内の埋蔵文化財の有無について県教育庁文化財課（以下、「文化財課」）に照会した。照会を受けた文化財課は、事業予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するため、平成 18・19・23 年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、中世から近世にかけての陶磁器片が出土するとともに、その時期に属すると考えられる柱穴などが検出し、埋蔵文化財の存在が明らかとなった。

そこで、埋蔵文化財の取り扱いについて大島支庁徳之島事務所建設課・文化財課・天城町教育委員会が協議した結果、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため、天城町教育委員会が主体となり発掘調査による記録保存を実施するすることとなった。平成 23 年度に条件の整った一部の箇所について発掘調査が実施され、平成 24 年度に報告書を刊行した。

さらに、令和 4 年度に県内遺跡事前調査事業により遺跡の内容を把握する試掘調査が実施された。その結果、試掘調査範囲内において複数の遺構と考えられるプランを検出したほか、平成 23 年度の発掘調査で確認した遺物包含層と特徴が類似した層が安定して堆積していることが確認された。

試掘調査の結果をもとに大島支庁徳之島事務所建設課・文化財課・天城町教育委員会が再度協議を行い、発掘調査を実施することとなった。天城町教育委員会と文化財課の協議の結果、県立埋蔵文化財センターが本調査を実施することとなった。調査面積は 300 m²で、調査期間は令和 5 年 12 月 1 日（金）から令和 6 年 2 月 27 日（火）（実働 29 日）である。

なお、現道下については令和 6 年度に 3 本のトレンチを設定して試掘調査を実施し、遺構・遺物等の把握に努めた。調査の結果、遺構・遺物は見られず、マージ層まで既に削平が及んでいたことがわかったため、本調査不要と判断された。

第 2 節 調査の体制と経過

1 試掘調査 令和 4 年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (大島支庁徳之島事務所)
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査担当	県教育庁文化財課 埋蔵文化財係長 横手浩二郎
協力者	天城町教育委員会社会教育課 係 長 具志堅 亮

主事補	中尾 綾那
立 会 者	大島支庁徳之島事務所建設課道路係 土木技師 平原 朗斗

2 本調査 令和 5 年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (大島支庁徳之島事務所)
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画	所 長 中村 和美 総務課長 荒瀬 勝己 調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広 文化財主事兼第一調査係長 平 美典
調査担当	文化財主事 高吉 伸弥 文化財主事 星野 清
調査事務	総務係長 白坂 由香

3 試掘調査（現道下） 令和 6 年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (大島支庁徳之島事務所)
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査担当	県教育庁文化財課埋蔵文化財係 文化財研究員 鮫島えりな 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 星野 清
協力者	天城町教育委員会社会教育課 係 長 具志堅 亮
立 会 者	大島支庁徳之島事務所建設課道路係 技術主査 山本 泰士

4 調査経過（日誌抄より）

本調査について日誌抄を集約して記す。	
12月 4 日	作業開始、環境整備、NA～NC－23・24 区表土除去、I・II 層掘り下げ
14 日	九州文化財研究所による杭打設作業実施
1 月	NE～NG－23・24 区表土除去 I・II 層掘り下げ
2 月	NC～NE－23・24 区表土除去 I・II 層掘り下げ
15 日	所長視察、空撮実施
19 日	九州文化財研究所による調査区内測量業務 委託実施（20日まで）
27 日	発掘作業終了 現地引き渡し

5 整理・報告書作成 令和6年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
(大島支庁徳之島事務所)

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査企画	所 長	中村 和美
	次長兼総務課長	南 安洋
	調査課長兼南の縄文調査室長	黒川 忠広
	文化財主事兼第一調査係長	平 美典
調査担当	文化財主事	星野 清
	文化財主事	上浦 麻矢
調査事務	主幹兼総務係長	白坂 由香
調査指導	天城町教育委員会社会教育課 係長	具志堅 亮

11月 遺物接合・実測

12月 一般遺物の収納

天城町教委にて町教委実施分との照合及び指導
助言

遺物写真撮影

1月 遺構図等記録図面類の収納

2月 遺物収納・校正作業

報告書作成指導委員会

令和6年10月8日、11月6日、11月19日 調査課長
ほか6名

報告書作成検討委員会

令和6年11月22日 所長ほか6名

6 整理作業の経過

10月 遺物洗浄・注記・遺物接合・実測

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

琉球列島は、九州島と台湾島との間に北は種子島から南は与那国島に至る、約1,100kmの広がりをもって連なり、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島で構成されている。

奄美諸島は沖縄諸島の北側に位置し、有人島8島によって構成される。本遺跡が所在する徳之島は奄美諸島の中央に位置している。

徳之島は周囲81.1km、面積は248km²で、奄美諸島で奄美大島に次いで二番目に大きな島となり、島の東側に徳之島町、南側に伊仙町、西側が天城町と3つの行政区域に区分されている。島の中央には徳之島最高峰である井之川岳(645m)をはじめ、天城岳(533m)、三方通岳(496m)、大城山(329m)、馬鞍山(211m)、美名田山(437m)、丹発山(440m)、剥岳(382m)、犬田布岳(417m)などの山々が南北に連なる。山地の周囲にはその碎屑物が堆積した海岸段丘が広がり、さらにその外縁には琉球石灰岩の海岸台地が広がる。徳之島は、およそ標高200mを境にして山地と海岸段丘に分かれており、海岸段丘は上位面より糸木名層、木之香層、亀津層の3段階に区分される。山地に源を発する河川は、これらの海岸段丘や海岸台地を深く浸食しており、徳之島最長の秋利神川や鹿浦川では、比高差が100m以上にも及ぶ深い溪谷が形成されている。徳之島の北側から東側にかけては、山地の裾野が海岸近くまで延び、海岸部と裾野との間に海岸低地の幅が狭く広がる。南側から西側では、海岸段丘が発達しており、海岸部は岩礁もしくはは

断崖が主体となる。特に徳之島最西端の犬田布岬から平土野港にかけての海岸部は、隆起珊瑚礁の断崖が発達し、約11kmにわたって標高約31～100mの断崖が続く。

徳之島の植物相は、ソテツ・アダン・ガジュマルなどの亜熱帯性植物が多く見られるが、山地においてはオキナワウラジロガシ、スダジイ、アマミアラカシなどブナ科の植物が主体となる照葉樹林が広がっている。トクノシマカンアオイやトクノシマエビネ、トクノシマテンナンショウ、ハマノトラノオなど希少植物や徳之島固有種も多く自生している。

動物相は、国の特別天然記念物であるアマミノクロウサギやトクノシマトゲネズミ、ケナガネズミ、リュウキュウイノシシ、ハブ、イボイモリ、オビトカゲモドキ、アマミマルバネクワガタなど琉球列島固有の動物が多く見られるが、大型の哺乳動物は少ない。

天城町の地形を見てみると、町の中央にあたる平土野を境に北部と南部で様相が異なる。南部は西側に広大な海岸段丘が広がり、海岸部は断崖となる。東側の山地と西側の琉球石灰岩を基盤とする海岸段丘との間に、山地由来の碎屑物が堆積した海岸段丘が盆地状に広がっている。一方、北部は山地の裾野に広がる海岸段丘が緩やかな傾斜で海岸線に至り、海岸部には砂丘が発達する。現在、天城町北部の海岸の沖合には徳之島空港があり、空港の北側は干潟となっている。徳之島空港は発達した裾礁を埋め立てて建設されたものであり、空港が建設される前は、潮通りのよい礁地が広がっていたとされる。

天城町南部は、海岸段丘の海岸側の縁辺部に縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多数存在し、多くの建物跡が発掘されている。北部は、砂丘上において弥生時代から古代にかけての遺跡が多く立地している。

海岸部を概観すると、町のほぼ中央を流れる湾屋川を境にして北と南で地形が変化している。天城町南部の平土野から西阿木名にかけては隆起珊瑚礁が発達し、標高70～126mの広大な台地を形成している。海岸は急峻な断崖となり、裾礁はほとんど発達しない。これらの台地の海岸縁辺部には、塔原遺跡、鍋窪遺跡、千間遺跡、下原遺跡などの縄文時代後期～弥生時代前期の遺跡が多く立地している。

一方、天城町北部の松原から浅間にかけては、山地から流れ出た土砂が広大な沖積地を形成しており、海岸は砂丘地となり、なだらかな汀線が続く。

中組遺跡が立地する兼久集落は、天城町の南部にあたり、町中心部である平土野より南へ1.6kmの地点となる。兼久集落は標高約50～60mの隆起珊瑚礁の台地に形成されており、東側は断崖となる。集落の東側には標高437mの美名田山が聳え、その麓には播り鉢状の広大な沖積地が広がる。集落の西側には集落から一段高くなった隆起珊瑚礁の台地が広がり、台地西側の海岸部は断崖となっている。

本遺跡は兼久集落の中心部に位置している。遺跡の所在する県道の東西両側とも微高地になっており、遺跡一帯は水の集まりやすい場所となっている。

第2節 歴史的環境

徳之島で現在確認されている遺跡数は約170遺跡で、天城町で確認されている遺跡はその内30数遺跡である。

天城町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは、昭和60(1985)年に熊本大学考古学研究室によって行われた玉城遺跡の発掘調査を端緒とする。この時、発掘調査と併せて天城町の遺跡分布調査も行われ、天城町南部の隆起珊瑚礁の台地には縄文時代後期相当期から弥生時代前期相当にかけての遺跡が分布することに対して、天城町北部の砂丘地には弥生時代相当期以降の遺跡が分布するという地形により時代ごとの遺跡分布に偏りがあることが指摘された。

昭和63(1988)年には、熊本大学考古学研究室によって塔原遺跡の発掘調査が行われている。この遺跡は、兼久集落在住の向井一雄氏の採集活動や、吉岡武美氏によって周知された遺跡であるが、塔原遺跡を含む地区に県営畑地帯総合改善事業が計画された際に、兼久郷土史研究会を中心に同集落民の遺跡調査要望の声が高まり実現したもので、この時の調査では、竪穴建物跡3基と焼土遺構4基が確認されている。竪穴建物跡は地山を掘り込んだものと、竪穴の周壁沿いに溝を掘り、溝内に珊瑚

塊や石をめぐらすものの2つのタイプが確認されている。出土遺物を見てみると、土器は嘉徳Ⅱ式・面縄西洞式・喜念Ⅰ式・カヤウチパンタ式・宇宿上層式などが出土している。出土した石器のほとんどは伐採・木材加工用の石器や食物加工用の磨石・敲石・クガニ石などで、獣骨・魚骨が極めて少量しか出土しておらず、貝類にいたっては全く出土していないことから、塔原遺跡では狩猟・漁労も行われていたが、より植物性食料に依存した生活が行われていたと推察が行われている。

このように昭和の後半に学術調査が実施されたこともあり、早い段階から天城町の遺跡は注目されてきた。その後は公共工事に伴う発掘調査も増加し、新たな知見が得られている。近年では、洞穴遺跡の学術調査も実施され、これまで不明であった旧石器時代や縄文時代の様相解明に重要な発見が相次いでいる。これらを時代・時期ごとに概観していきたい。なお、時代や時期の名称は、文化面はじめ多くの部分で沖縄の影響を受けていることなどから、本土とは異なる時代名称を用いている場合もある。このため、おおよその比較を表1に示しておく。

下原洞穴遺跡では、奄美最古と言われていた南島爪形文土器が出土するⅡ層より下位のⅢ下層で波状条線文を施す新たな土器型式が出土している。Ⅲ下層中の炭化物から得られた放射性炭素年代測定結果では、縄文時代早期末から前期初頭の年代が示されている。また、Ⅰ・Ⅱ

表1 奄美・沖縄諸島の編年

14 C年代(年前～)	奄美・沖縄諸島	本土 (北海道を除く)
32,000～10,000年前	旧石器時代	旧石器時代 縄文時代草創期
14,000～7,000年前?	(土器文化の始まり?)	縄文時代早期
7,000年前	貝塚時代前1期	
6,000年前	貝塚時代前2期	縄文時代前期
5,000年前	貝塚時代前3期	縄文時代中期
4,500年前	貝塚時代前4期	縄文時代後期
3,300年前	貝塚時代前5期	縄文時代晩期
2,800年前	貝塚時代後1期	弥生・古墳時代
1,500年前	貝塚時代後2期	飛鳥・平安時代
1,000～500年前	グスク時代	鎌倉・室町時代

※徳之島町史通史編Ⅰを一部改変

層から大量の磨製石鏃が出土し、製作工程の各段階の資料が出土している。また、製作に使用された工具類として石錐や砥石などが出土しており、製作跡としても注目される。報告書では、これらは南島爪形文土器に伴うとされた。

ウンブキ水中鍾乳洞遺跡では、入口から 70 m 進んだ地点に完形の壺形土器が発見され、土器の年代測定が実施された。その結果、11,700 ～ 7,400 年前に製作された土器であるとされた。

縄文時代後期では、下原Ⅰ～Ⅳ遺跡において堅穴建物跡が 4 基検出された。面縄東洞式土器と松山式土器、市来式土器との関係を考える上で、また、深鉢形土器の他に壺形土器も小片ながら出土しており、県本土、奄美、琉球と言った地域との関係を知る上で重要である。特に、下原Ⅲ遺跡で検出した堅穴建物跡 1・2 号は、一括性の高い遺物の出土状況となっている。1 号堅穴建物跡からは仲泊式土器が出土し、2 号堅穴建物跡からは面縄東洞式土器が出土している。2 号堅穴建物跡からは、松山式土器、市来式土器の可能性もある資料も出土している。

千間遺跡は、兼久集落の西、海を臨む隆起石灰岩の台地崖上に立地し、縄文時代後期の面縄東洞式土器や嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器などが採集されている。

塔原遺跡は、先に紹介した熊本大学の調査の後、平成 5 (1993) 年から平成 8 (1996) 年に、畑地帯総合整備事業に伴って再び発掘調査が行われている。平成 7 (1995) 年は、熊本大学が調査した地点から南西 150 m の地点 (A 地点) の発掘調査が行われ、最大 17 基にも及ぶ堅穴建物跡群が確認されている。当該地点は天地返しによる遺構の削平を免れており、また、集落構成を探るうえでも貴重であることから、部分発掘調査によって遺跡の年代・性格を把握したうえで現地保存されている。

平成 8 (1996) 年には、熊本大学が調査した C 地点の全面発掘が行われている。この調査によって、当該地点で新たに 3 基の堅穴建物跡が発見されている。特に 2 号住居跡の床面からは、土器製作時の粘土接合痕が顕著に残る土器が出土しており、この特徴から弥生時代に相当する堅穴建物跡である可能性が指摘されている。これらの成果から、塔原遺跡が縄文時代晩期相当期から弥生時代前期相当期の時期に営まれた集落と評価づけられている。出土遺物を見てみると、宇宿上層式・仲原式土器とともに、それらに後続すると考えられる突帯をもつ甕形土器が多く出土している。北や南からの搬入土器も確認され、土器底部においては、尖底、平底があり、在地的な型式変化と九州島の土器文化の影響が合わさって奄美独自に変遷した可能性が想定されている。獣骨の分析では、イノシシ骨が小型で現生のリュウキュウイノシシに類似し、シカ骨が出土していない特徴が指摘された。

このように複数回に渡って調査された塔原遺跡からは、合計 31 基の堅穴建物跡と 4 基の土坑、不明遺構 2 基が検出されている。これらの堅穴建物跡は、素掘りの堅穴から周縁にサンゴ礫を配するものへの変遷することが明らかとなった。

この他にも、塔原遺跡の特徴の一つとして、石器が多く出土していることが挙げられる。平成 6 (1994) 年に調査された堅穴建物跡 5 号からは、磨製石斧、打製石斧、磨敲石、クガニ石などが一括で出土している。向井一雄氏が塔原遺跡より採集した黒曜石は、石鏃 7 点、剥片類 188 点と琉球列島では一番多くの黒曜石が得られている。採集された黒曜石の産地は、理化学分析によって佐賀県伊万里市腰岳産と推定されている (小畑・角縁・盛本 2004)。黒曜石とともに多く採集されているチャートは、石核から目的剥片、製品など剥片石器の製作に係る一連の資料が採集されており (天城町文化財活性化実行委員会 2012)、塔原遺跡で石器製作が行われていたことを示唆するものと考えられる。

鍋窪遺跡は、塔原遺跡に隣接して海岸沿いの急峻な崖の上に位置し、千間遺跡と谷を挟んで向かい合う。塔原遺跡と同時代の遺跡である。塔原遺跡の範囲確認調査の結果、一連の遺跡である可能性が示された。

馬塔遺跡は、前野集落西の砂丘上に位置する。砂取によって大部分が破壊されているが、兼久式土器などが採集されている。このような立地でほぼ同時代の遺跡が南に尾志理田遺跡、オカゼン遺跡、戸ノ口遺跡、塩浜遺跡と続く。

さて、中世に入ると、徳之島は大きな転換期を迎える。このころに徳之島を含む奄美諸島は農耕が定着したと考えられており、それに伴った鉄器の使用や加工の痕跡が徳之島の遺跡においても確認されるようになる。また、カムイヤキ陶器窯跡の操業が開始され、琉球列島一円にカムイヤキが運ばれることとなり、広大な物流圏の中心地となる。このカムイヤキ陶器窯跡は、昭和 58 年の発見からこれまでに、伊仙町の山中の広い範囲にわたって確認されており、100 基前後の窯跡が存在すると考えられている。

玉城遺跡では、数条の溝と焼土、ピットなどの遺構や、水溜施設と考えられる遺構などが確認されている。出土遺物はカムイヤキ、白磁碗Ⅳ類、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁Ⅰ～Ⅲ類などで、これらから遺跡の年代が 12 世紀から 14 世紀と推定されている。また、滑石を混入した土器の存在に注目し、12 世紀から 14 世紀の印象を受けると指摘された。

中里遺跡は、標高 40 ～ 50 m の琉球石灰岩を基盤とする台地に立地し、縄文時代晩期から弥生時代前期相当期の堅穴建物跡 3 基が検出されている。中世では、11 世紀から 14 世紀にかけての掘立柱建物跡や木棺墓が検出さ



れている。木棺墓は重機の掘削により詳細は不明であるが、掘立柱建物跡を構成したと考えられる柱穴が多く確認され、このうち1間×1間の4本柱のものは高倉の可能性が指摘されている。それらに伴って長崎県産の滑石製石鍋や白磁碗Ⅳ・Ⅴ類などが出土している。

下原Ⅳ遺跡からは、中世の掘立柱建物跡が確認されており、玉城遺跡の独立丘陵の城塞的な立地とは異なり、広い大地に立地しているため、中世遺跡の変遷を考えるうえで貴重な資料となっている。また、滑石を混入した石鍋模倣土器が出土するなど注目される。

【引用・参考文献】

小畑弘己・盛本勲・角縁進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』No.4 石器原産地研究会

白木原和美 1992「琉球弧の考古学～奄美と沖縄を中心に～」『海と列島文化』6巻 小学館

河口貞徳 1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9号 鹿児島県考古学会

高宮廣衛 1993『沖縄縄文土器研究序説』第一書房

高宮廣衛 1994『沖縄の先史遺跡と文化』第一書房

高宮広士 2023「徳之島の先史・原史時代と本編の構成」『徳之島町史通史編Ⅰ』徳之島町

天城町教育委員会 2004『下原（Ⅰ～Ⅳ）遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

天城町教育委員会 2013『中組遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

天城町文化財活性化実行委員会 2012『天城町内文化財悉皆調査報告書』天城町文化財活性化実行委員会

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物
1	531	30	中組	大島郡天城町兼久字中組	台地	中世	本報告書
2	531	15	塔原	大島郡天城町兼久字塔原	台地	縄文，弥生，中世	竪穴建物跡、仲原式
3	531	16	鍋窪	大島郡天城町兼久字鍋窪	台地	縄文	石斧
4	531	17	千間	大島郡天城町大津川字千間	台地	縄文	面縄東洞式
5	531	22	瀬滝	大島郡天城町瀬滝字上屋久	台地	古代，中世，近世	
6	531	18	長竿	大島郡天城町瀬滝字長竿	台地	古代，中世，近世	磁器
7	531	19	戸森の線刻画	大島郡天城町瀬滝字中山	台地	近世	磁器
8	531	27	加万答	大島郡天城町西阿木名字加万答	台地		
9	531	26	下原4	大島郡天城町西阿木名字加万答	台地	縄文	竪穴建物跡，面縄東洞式
10	531	24	下原2	大島郡天城町西阿木名字加万答	台地	縄文	
11	531	25	下原3	大島郡天城町西阿木名字加万答	台地	古代，中世，近世	竪穴建物跡，面縄東洞式
12	531	23	下原1	大島郡天城町西阿木名字加万答	台地	縄文	竪穴建物跡，嘉徳式
13	531	33	下原洞穴	大島郡天城町西阿木名字加万答 139・140	洞穴	縄文，中世	埋葬址，南鳥爪形文
14	531	32	コウモリイオー	大島郡天城町西阿木名字加万答 122-1	洞穴	縄文	南鳥爪形文
15	531	21	西阿木名	大島郡天城町西阿木名字水名田	台地	古代，中世，近世	壺

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本遺跡の調査は、平成23年度の天城町教育委員会による発掘調査グリッドを南側へ延長する形で設定し、南から北へNA～NF、東から西へ23～24として5mグリッドを設置した。

本調査区は、県道の歩道部分や町道の一部も含むため、安全確保と地域住民の動線を保持できるように留意して調査を行う必要があった。そこで、調査区をNA～NC－23・24区、NC～NE－23・24区、NE～NF－23・24区の3つに分けて、順に調査を行った。調査方法は、重機（バックホウ）によって表土を除去した後、人力による掘り下げを行った。表土を除去したところ、建築物などの影響で削平が激しく、IV層上面で遺構を検出した。

遺構の調査については、それぞれの遺構の特徴に適した道具を用いて慎重に調査を行った。記録は検出状況の写真撮影を行った後、平面プランの実測、半裁、遺物取り上げ、半裁状況写真撮影、断面実測、埋土の記録、完掘、完掘状況写真撮影、完掘状況実測を行った。

遺物は、小破片や攪乱に関連するものはグリッドごとに一括して取り上げを行い、その他の遺物は、遺物出土状況の写真撮影を行った後、平板による遺物取り上げを行った。

遺跡の空中撮影は、九州電力株式会社鹿児島支店九州ドローンサービスに依頼し、遠景・近景の撮影を2月15日に実施した。

調査終了後は埋め戻しを行い、発掘調査完了後に事業主体者に引き渡しを行った。

第2節 整理作業の方法

令和6年度に実施した。遺物洗浄の後、注記を実施して接合作業を進めていったが、小破片に関しては一部未注記の状態である。実測は、作業員の協力の下職員が確認し、浄書を行い、遺物の種類に応じて適宜拓本を貼付した。また、遺物の傾きにあわせて写真を撮影し、これを断面図などと合成して掲載することとした。実測遺物の抽出後は、掲載遺物と一般遺物とに分けて作業を進め、材質や産地などに分けて収納作業を行った。

第3節 層序

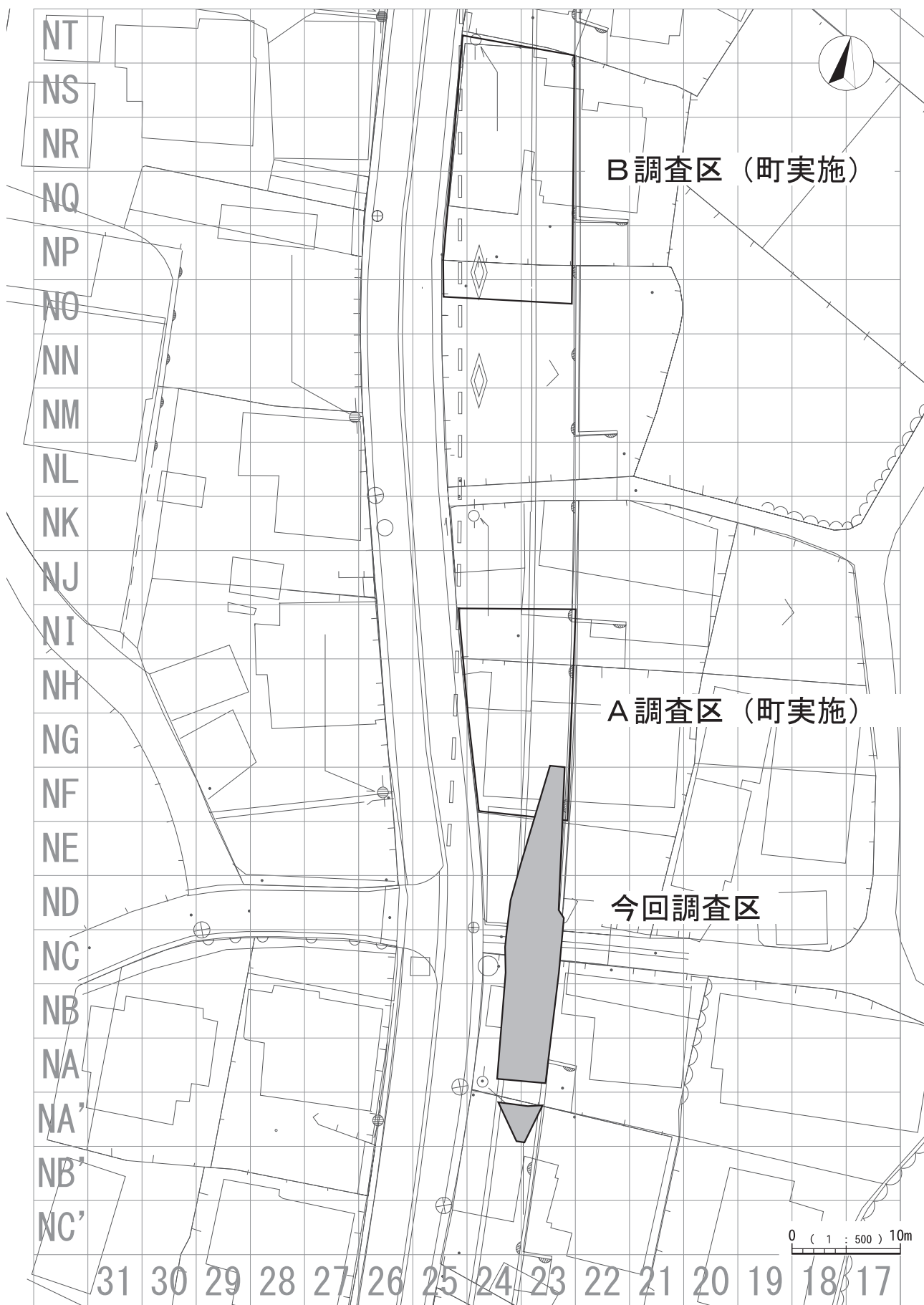
今回の調査範囲は、平成23年度の町教委発掘調査のA調査区に接しているが、A調査区では現代の開発によって包含層が残存しておらず、150m離れたB調査区を参考に調査を進めていった。

令和4年度に実施した試掘調査も同様で、その際はIII a層類似の暗褐色土を埋土に持つ柱穴状のプランを検出

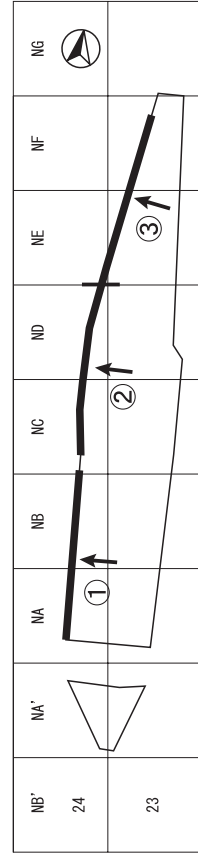
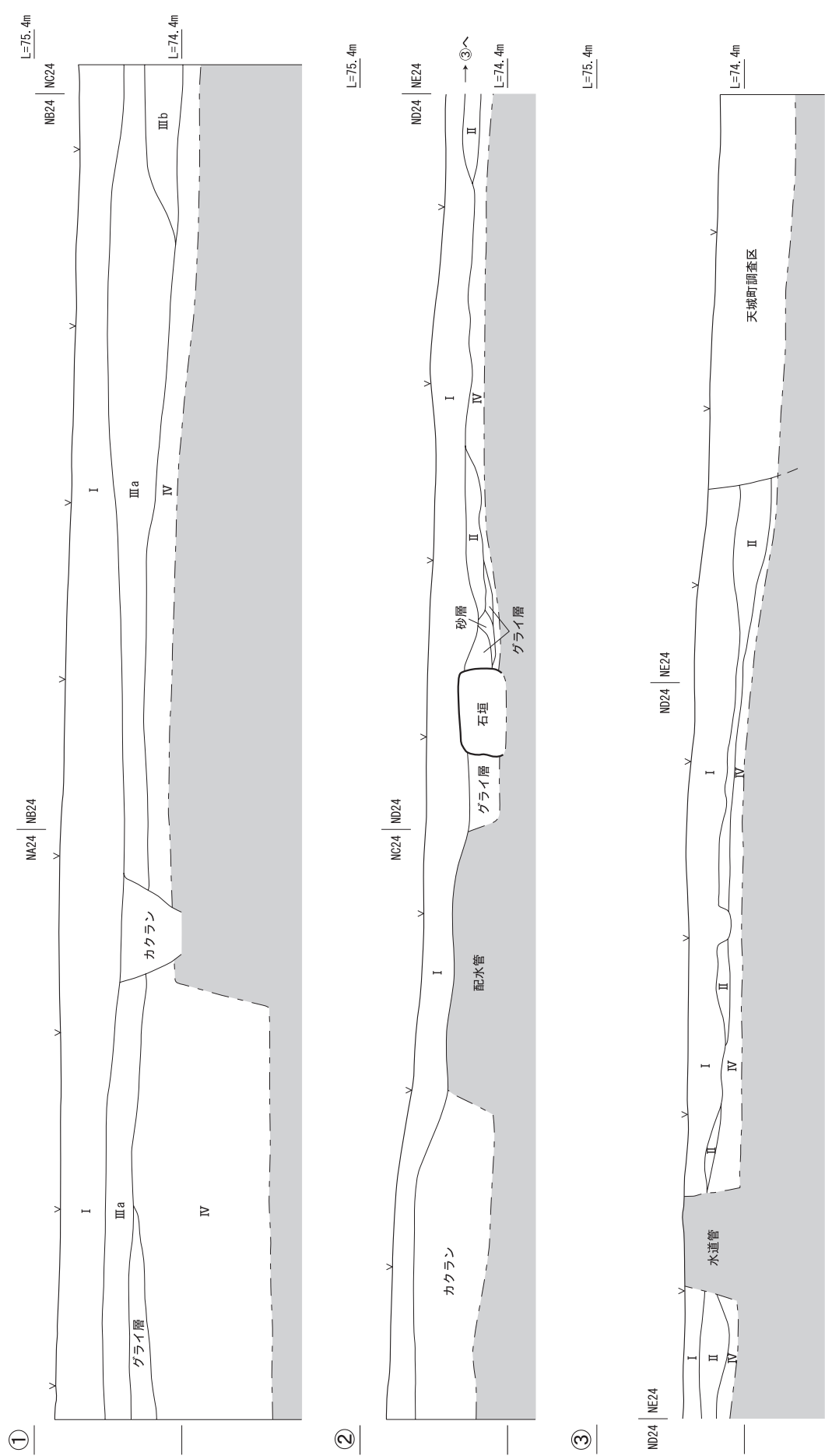
している。今回の調査では、これをIII a層としてIII b層まで確認でき、その下層はマージ層であった。このことから、マージ層をIV層とし地山と判断した。

表3 町教委B調査区の層位

層序	概要等
I層	表土。宅地造成のためにII層上面が削平され、その上部に造成された層。
II層	黒褐色を呈する遺物包含層である。層中に多くの炭・赤色粒を含む。
III a層	暗褐色を呈する遺物包含層である。層中に炭・赤色粒を含み、下層のIII b層より暗い色調となる。
III b層	褐色を呈する遺物包含層である。層中に炭・赤色粒を含み、下層のIII c層より明るい色調となる。
III c層	暗褐色を呈する遺物包含層である。層中に炭・赤色粒を含む。
IV a層	黒褐色を呈する遺物包含層である。黄色土がブロック状に混じり、炭・赤色粒も含まれる。
IV b層	黒褐色を呈する遺物包含層である。IV a層とは異なり、黄色土がブロック状に混じらないが、炭・赤色粒が層中に含まれる。
IV c層	黒褐色を呈する遺物包含層である。炭・赤色粒が層中に含まれるが、IV a層、IV b層に比べ少ない。層中にマンガンも認められる。
IV d層	灰黄褐色を呈する土層である。層中に炭・赤色粒を含む。
V 3層	暗褐色を呈する土層で、マンガン層中に含む。炭・赤色粒をごく少量含んでいる。
VI 1層	にぶい黄褐色土と明黄褐色土と明赤褐色土が混じり合う土層で、遺物は出土しない。
VI 2層	褐色を呈する土層で、遺物は出土しない。粘質土でしまりが強く、層中にマンガンが多く含む。
VI 3層	褐色を呈する土層で、遺物は出土しない。粘質土でしまりが強い。層中にマンガンが多く含み、地山との境にはマンガンが厚く堆積する。
VI 4層	にぶい黄褐色を呈する土層で、層厚が薄い。
VI 5層	明褐色を呈する土層で、遺物は出土しない。粘質土でしまりが強い。
VI 6層	灰黄褐色を呈する土層で、遺物は出土しない。粘質土でしまりが強い。



第2図 周辺地形図



第3図 土層断面図

第4章 調査の成果

第1節 遺構の調査

(1) 溝状遺構

NA－23・24～NC－23・24区にかけて、IV層上面で延長12m、幅1.2mが検出された。南北方向に延びているが、南側のNA'－23・24ではこの延長は確認できなかった。北側はNC－23・24区で略方形に広がる土坑状の落ち込みに向かって延びている。

溝は周辺地形に沿って南が高く、北が低く傾斜している。現代の排水溝により北側は大きく削平を受けているが、石垣の基礎付近まで広がっていたものと思われる。検出時から小礫や拳大の礫を含んでおり、床面あるいは下層においても多量の礫が出土している。これらと混在するかたちで陶磁器類も出土しているが、遺構内からは、近現代のガラス片や瓦、獣骨類を含んでいた。遺物の帰属時期も幅広く、中世から近現代まで確認でき、一括性は低いと判断される。このため、器種や産地によって分類して掲載した。

1～8は中世に属する。1・2は青磁碗である。1は、体部の立ち上がりが打ち欠くように全面が剥離している。3～5はカムイヤキ片で、他の資料と比べやや摩滅が激しい印象がある。

9～67は近世に属する。9～21は碗である。9は口縁部がやや丸みを呈する荒磯文の碗である。14は口縁部を欠く。16は陶胎染付碗である。口唇端部が細く窄まる。17～19は薩摩焼の加治木・始良系の陶器で18・19は蛇の目釉剥ぎが明瞭に残る。20・21は体部下半まで施釉されている。22～24は皿である。23は蛸唐草文が見られる。24は陶器で、褐色の釉薬で見込みに蛇の目釉剥ぎが明瞭に残る。25・26は赤茶褐色の胎土である。27は体部立ち上がりが丸みを帯び、瓶状を呈する。

28～43は甕ないし壺、あるいは鉢で、産地は大きく薩摩焼と沖縄とに分かれる。50～52は土瓶の身で薩摩焼と思われる。53～65はすり鉢で、53は肥前系、54～56は薩摩焼、57～65は沖縄産である。66・67は胎土色調から沖縄産としたが、その他の器形として分類した。

(2) 土坑

5基が検出された。

1号土坑

NF－23区IV層上面で検出された。東側が大きく攪乱を受けている。平面形状は円形で長軸60cm、検出面から床面までの深さは約10cmと浅い。床面は、南側がわずかに高く北側へ傾斜する。調査時点では、柱穴状の遺構としていたが、平面形状や規模から土坑として報告する。遺構内からは遺物は出土していない。

2号土坑

ND・NE－23区IV層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸短軸共に約80cm、検出面から床面までの深さは5cmで、床面は浅いながらも水平に安定している。埋土は、にぶい赤褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

3号土坑

ND・NE－23区IV層上面で検出された。平面形状は不定形で、長軸及び短軸ははっきりしない。検出面から床面までの深さは30cmで、埋土は5つに分層出来た。北側床面には不定形な高まりがあるが性格等不明である。遺構内から遺物は出土していない。

4号土坑

ND－23区IV層上面で検出された。平面形状は楕円形で、長軸80cm、短軸70cm、検出面から床面までの深さは10cmで、埋土は、にぶい赤褐色土であった。東側にステップ状の段を有し床面中央よりやや東寄りで柱穴状の掘り込みが見られた。遺構の重複を想定したが、はっきりと分層出来なかった。遺構内から遺物は出土していない。

5号土坑

ND－23区IV層上面で検出された。平面形状はカクランや調査区外へとプランが延びているため明確ではないが、長軸80cmの概ね円形プランを呈すると思われる。検出面から床面までの深さは10から25cmで、北側に緩やかに深くなる。埋土は、明赤茶褐色であった。遺構内から遺物は出土していない。

(3) 柱穴

11基が確認された。検出はいずれもIV層上面である。円形プランで検出され、検出面から底面まで深いものと浅いものがあるが、調査区の北側から通し番号を付けて掲載した。

1号柱穴

NF－23区IV層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸22cm、短軸20cm、検出面から床面までの深さは12cmで、埋土は、暗褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

2号柱穴

NE－23区IV層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸35cm、短軸32cm、検出面から床面までの深さは5cmで、埋土は、黒褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

3号柱穴

NE－23区IV層上面で検出された。平面形状は円形

で、長軸 22 cm、短軸 20 cm、検出面から床面までの深さは 30 cm で、埋土は 2 層に分かれる。遺構内から遺物は出土していない。

4 号柱穴

NE - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 20 cm、短軸 20 cm、検出面から床面までの深さは 15 cm で、埋土は、褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

5 号柱穴

NE - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 30 cm、短軸 25 cm、検出面から床面までの深さは 27 cm で、埋土は、浅い部分に堆積する褐色土を切るように赤茶褐色のブロックを含む褐色土が堆積している。遺構内から遺物は出土していない。

6 号柱穴

NE - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 35 cm、短軸 33 cm、検出面から床面までの深さは 12 cm で、埋土は、褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

7 号柱穴

NE - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 30 cm、短軸 25 cm、検出面から床面までの深さは 10 cm で、埋土は、暗褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

8 号柱穴

NE - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 25 cm、短軸は調査区外へ延びるため不明だが 25 cm 程度になると思われる。検出面から床面までの深さは 17 cm で、埋土は、褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

9 号柱穴

NB - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 27 cm、短軸 22 cm、検出面から床面までの深さは 10 cm で、埋土は、黒褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

10 号柱穴

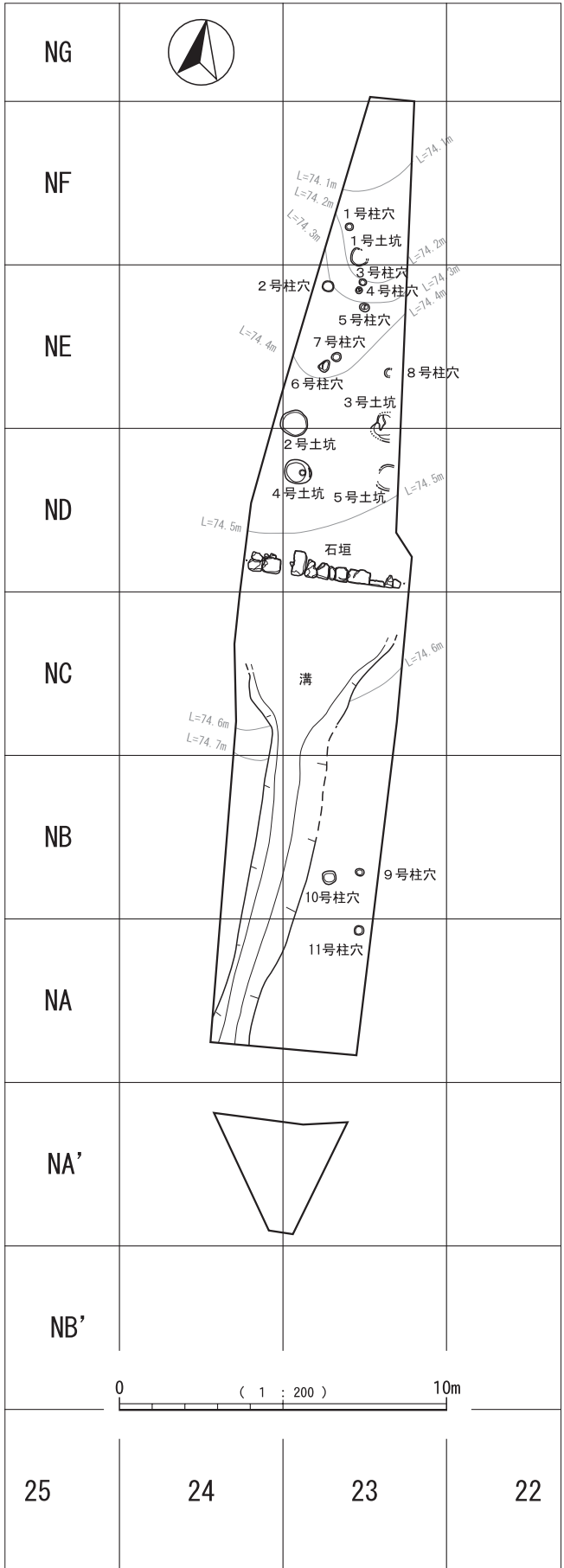
NB - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 40 cm、短軸 40 cm、検出面から床面までの深さは 8 cm で、埋土は、暗褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。比較的大型の形状である。

11 号柱穴

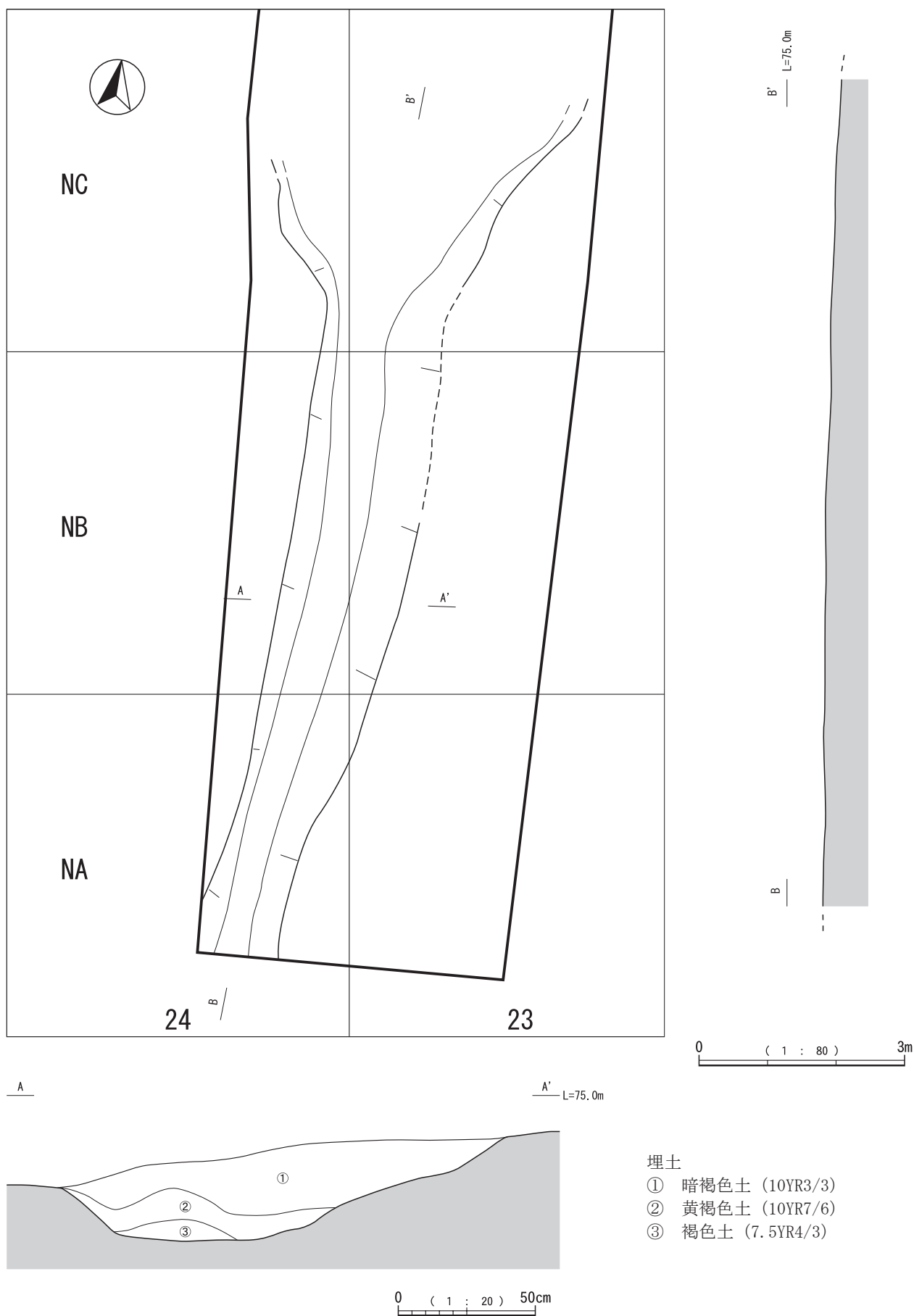
NA - 23 区Ⅳ層上面で検出された。平面形状は円形で、長軸 30 cm、短軸 28 cm、検出面から床面までの深さは 14 cm で、埋土は、黒褐色土であった。遺構内から遺物は出土していない。

(4) 石垣

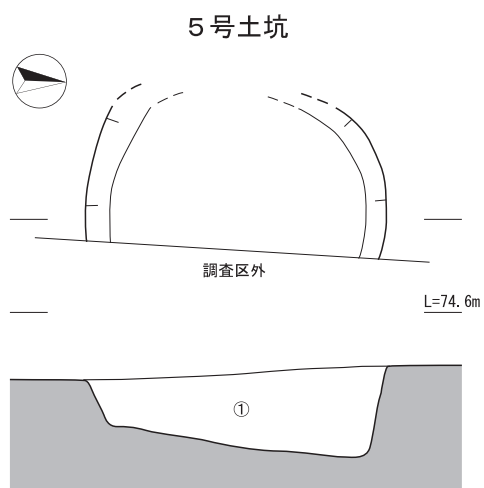
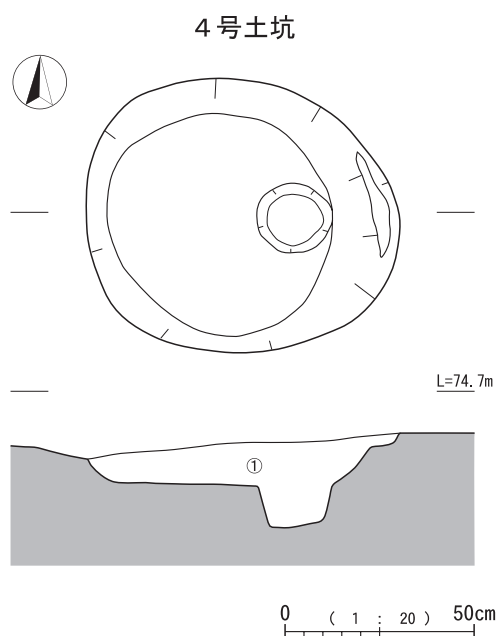
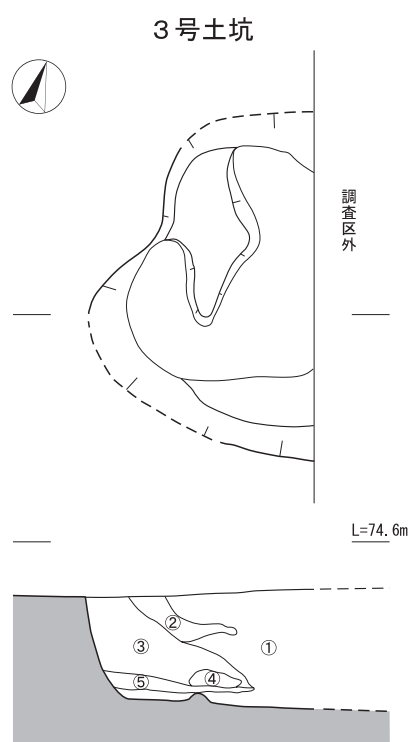
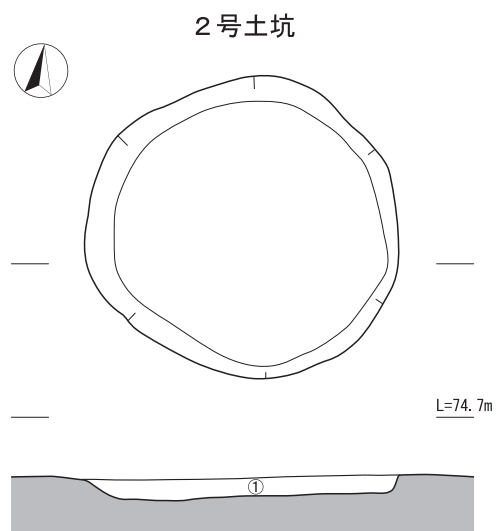
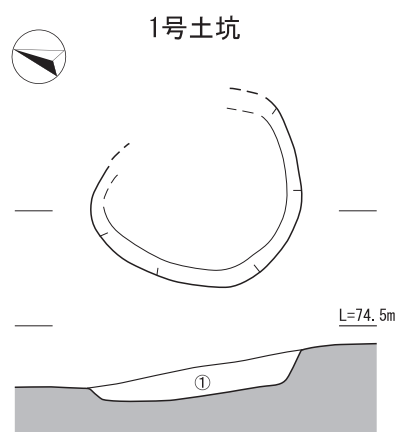
ND - 23・24 区Ⅳ層上面で検出された。調査区の東西



第 4 図 遺構配置図



第5図 溝状遺構実測図



- 埋土

- 1 号土坑

- ① 黑褐色土 (7.5YR3/2)

- 2号土坑

- ① にぶい赤褐色土（黒色ブロックわずかに混入）（5YR4/4）

- 3 号土坑

- ① 褐色土 (10YR4/6)

- ② 暗褐色土 (10YR3/4)

- ③ 明褐色土 (7.5YR5/6)

- ④ 明赤褐色土 (2.5YR5/8)

- ⑤ 黑褐色土 (10YR3/1)

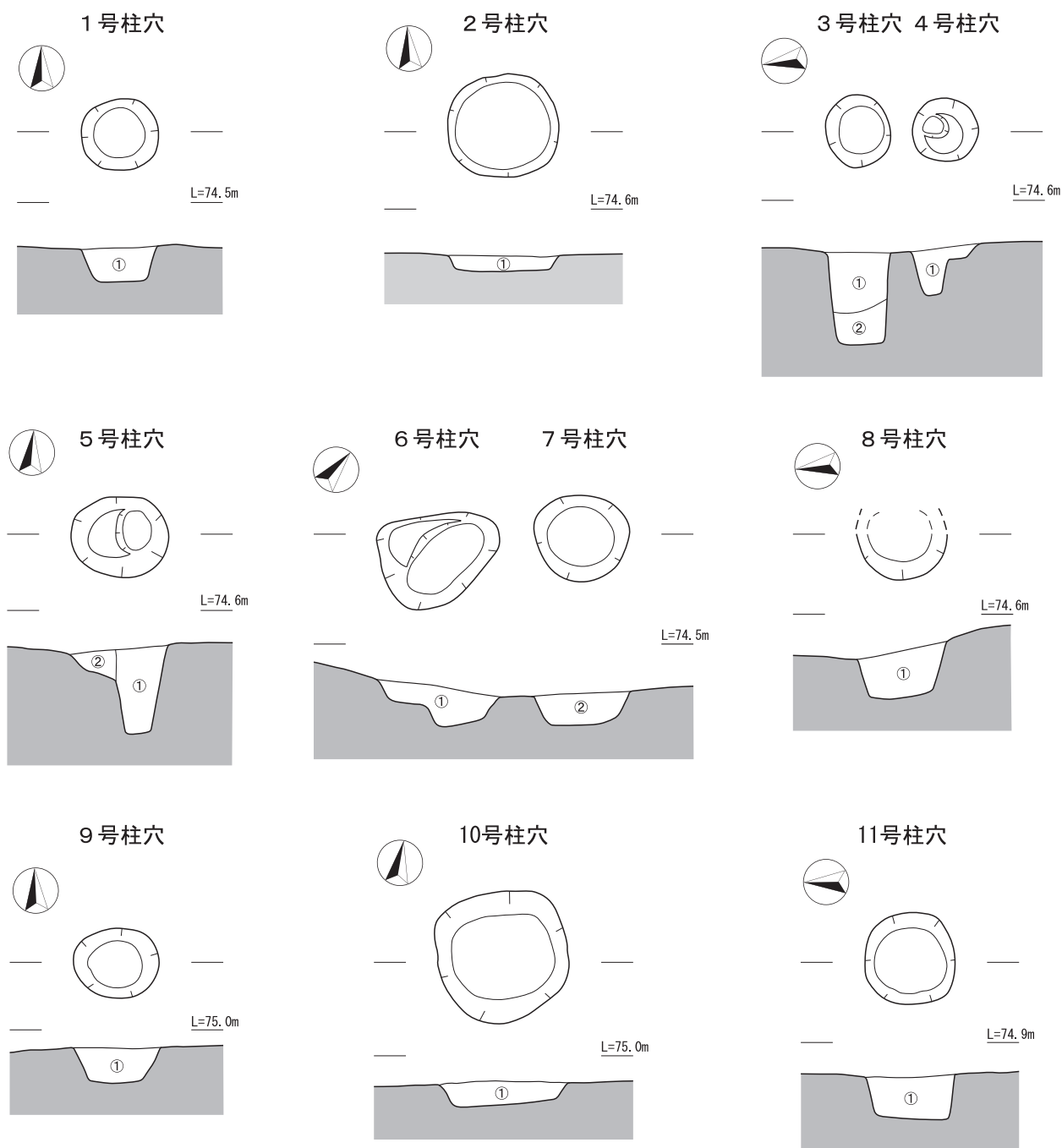
- 4号土坑

- ① にぶい赤褐色土 (5YR4/4)

- 5 号土坑

- ① 明赤褐色土 (5YR5/8)

第6図 土坑

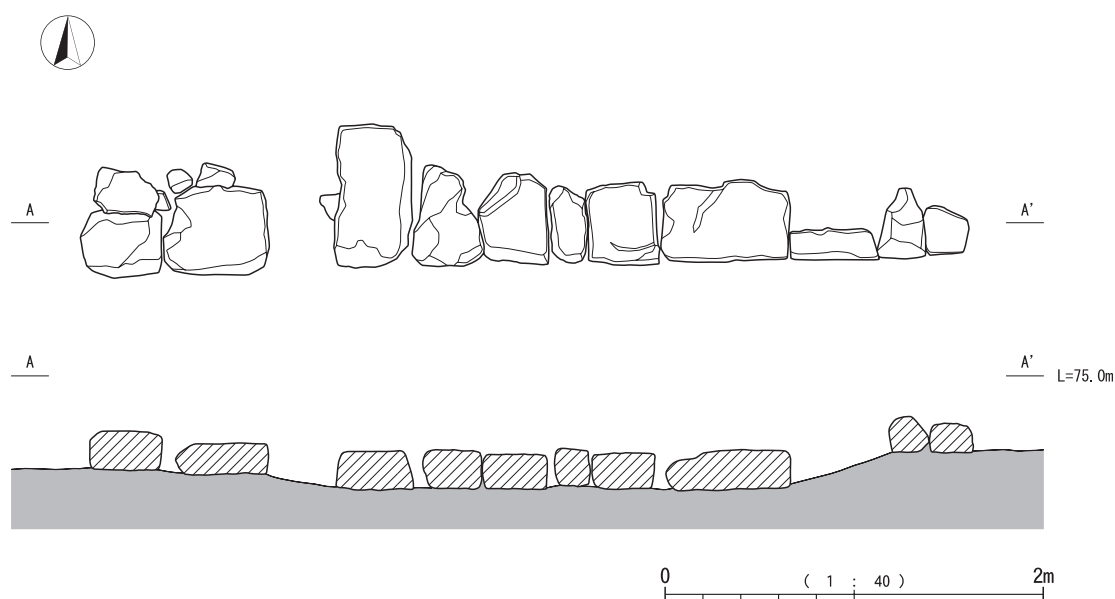


埋土

- 1号柱穴
①暗褐色土 (7.5YR3/3)
- 2号柱穴
①黒褐色土 (7.5YR3/2)
- 3号柱穴
①褐色土 (7.5YR4/3)
②明褐色土 (7.5YR5/6)
- 4号柱穴
①褐色土 (7.5YR4/3)
- 5号柱穴
①褐色土(赤茶褐色土のブロック含む)
(7.5YR4/6)
②褐色土 (10YR4/4)

- 6・7号柱穴
①褐色土 (7.5YR4/3)
②暗褐色土 (7.5YR3/3)
- 8号柱穴
①褐色土 (7.5YR4/3)
- 9号柱穴
①黒褐色土 (10YR2/3)
- 10号柱穴
①暗褐色土 (10YR3/3)
- 11号柱穴
①黒褐色土 (10YR3/1)

第7図 柱穴



第8図 石垣

方向に延び、4.7 m分が検出されたが、調査区外の東西方向に延びるため総延長は不明である。個々の石材は一边約 20 ～ 30 cm，厚さ約 20 ～ 30 cm 程度の方形ないし長方形を意識した石灰岩を石材として用い，南側の面を直線的に仕上げている。北側の面も概ね揃っているが南側程はない。石垣を境に，北側には黒色土とⅣ層との混在土が充填されており，石垣設置のための造成と判断した。一方，石垣南側には，グライ化した層が見られ，水的作用による堆積と考えられる。これらのことから，石垣は，水留の機能を目的に設置されたものであると判断できよう。なお，石垣南側にある堆積層からはプラスチック片なども見られ，その機能は現代まで維持されていたと思われる。

第2節 遺物

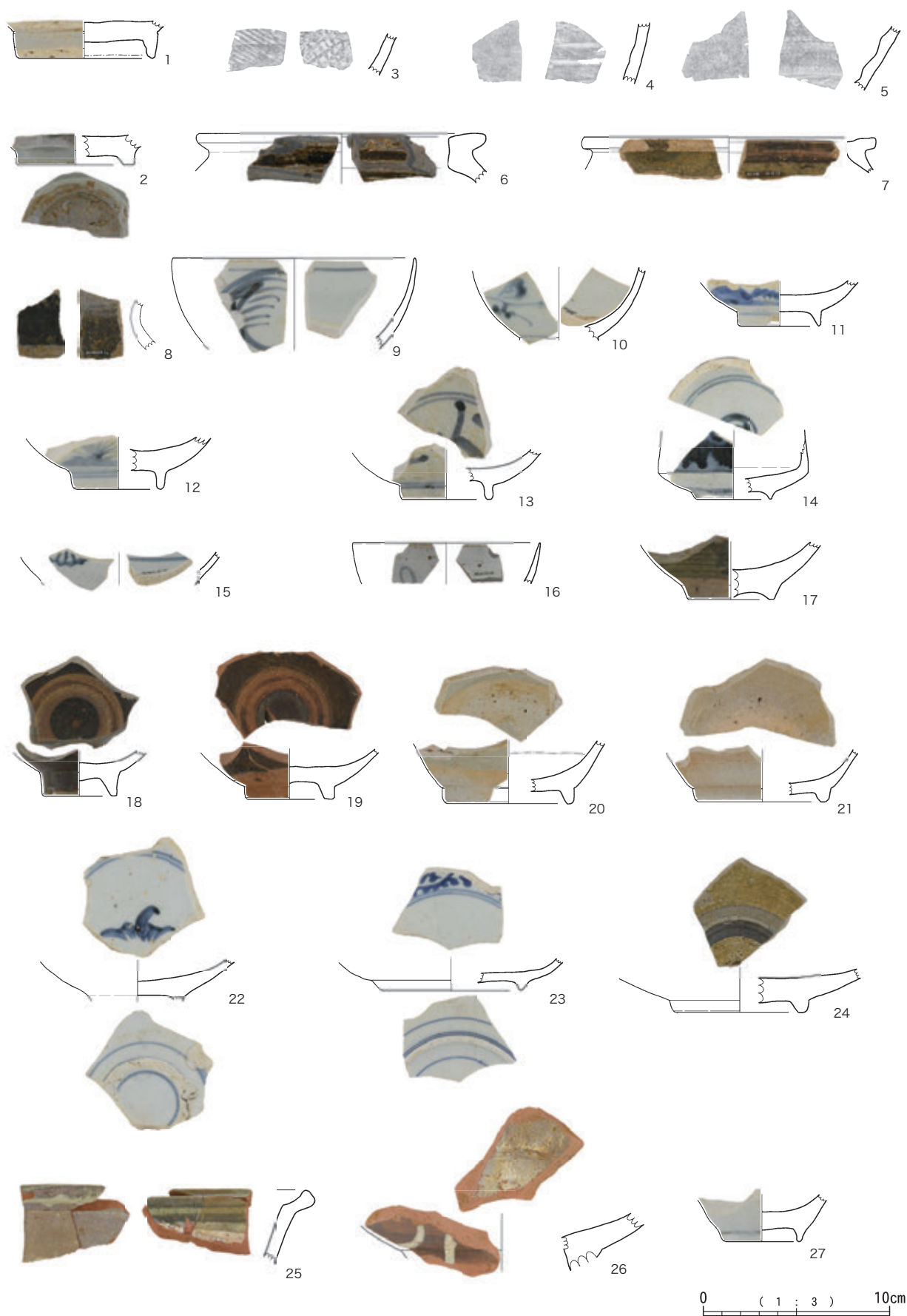
包含層は，近現代の削平やカクランなどで多くが消失してわずかに残存しているのみであった。また，中世とそれ以降とを明確に区別できなかったことから，一括して掲載している。遺物数量は，カクラン層中のものも含め，接合作業を経て 411 点が確認され，このうち 31 点を図化した。

68 ～ 85 は碗・皿・鉢などの食膳具である。68 は鎗蓮弁文が明瞭である。71 は景德鎮窯の赤絵である。72 は小杯でカクランより出土した。73 ～ 82 は碗で，75 は口縁部が丸みを帯びる。76 は一重網目文が見られる。78 は厚みがある。80 ～ 82 は胎土や施釉の雰囲気から沖縄産と思われる。85 は陶器の鉢である。86 ～ 88 は内面が無釉で瓶に分類した。87・88 は瓶類に分類した。仏花瓶の可能性もある。92 は肥前系のすり鉢片である。94

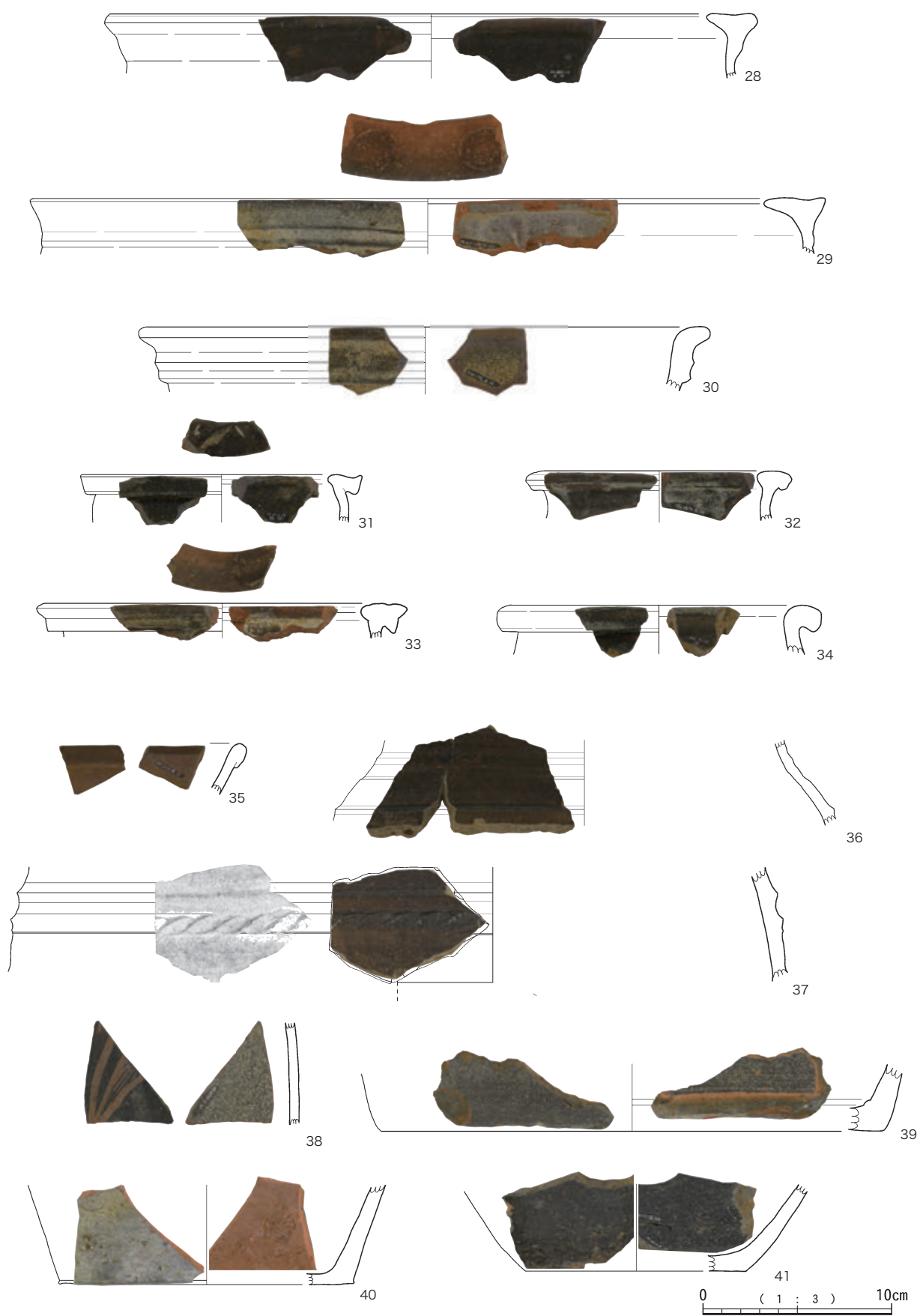
は沖縄産としたがはっきりしない。口縁端部が剥落している。97・98 は器形や産地等はっきりしない。

表4 遺構一覧表

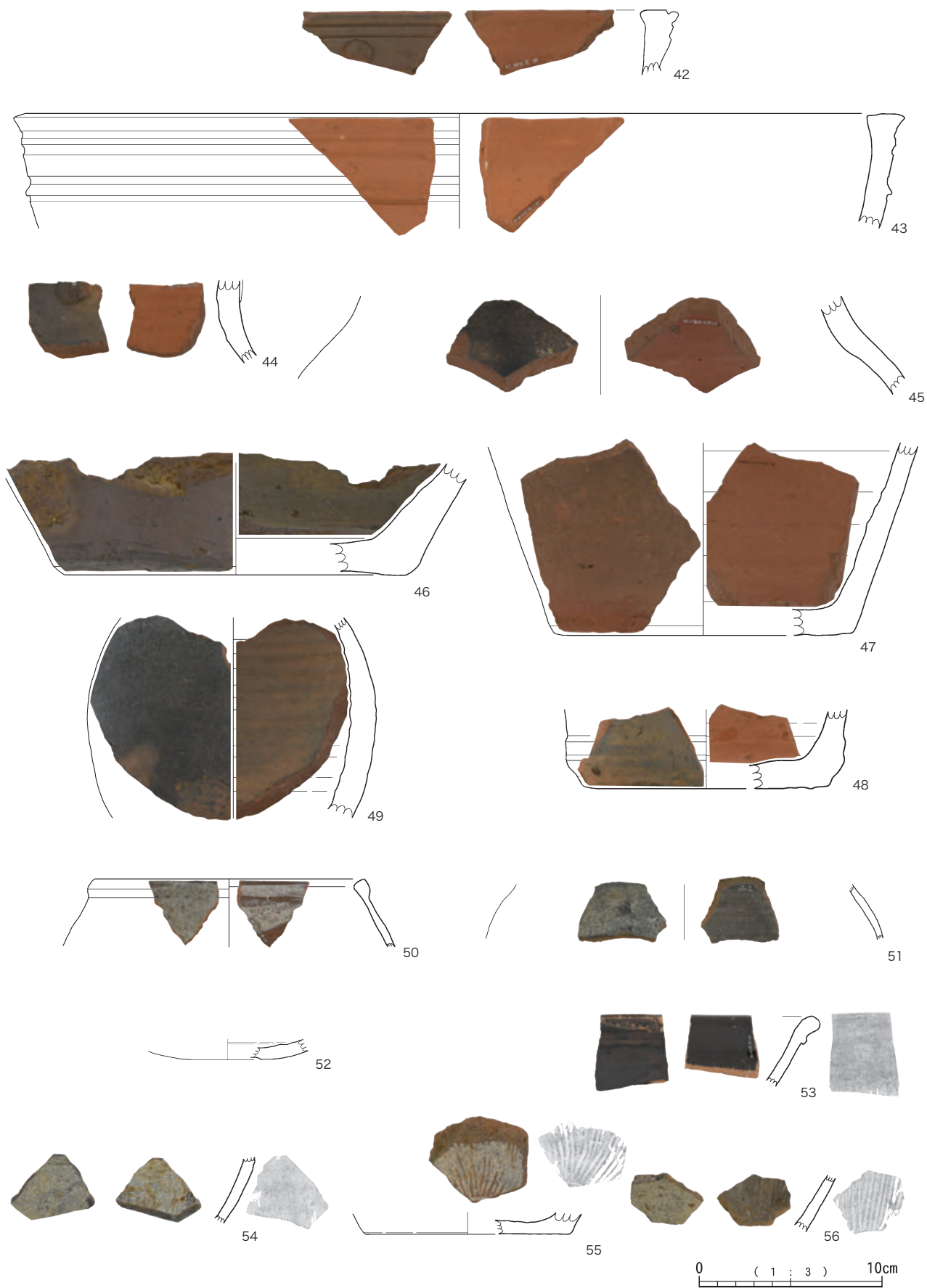
遺構名称		現場番号等	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
溝状遺構		SD1	-	120	20	
土坑	1	P24	(60)	60	10	
	2	SK5	80	80	5	
	3	SK3	(82)	(73)	30	
	4	SK6	80	(70)	10	
	5	SK7	80	(80)	25	
柱穴	1	P13	22	20	12	
	2	P16	35	32	5	
	3	P14	22	20	30	
	4	P15	20	20	15	
	5	P17	30	25	27	
	6	P21	35	33	12	
	7	P22	30	25	10	
	8	P23	25	(25)	17	
	9	P11	27	22	10	
	10	P10	40	40	8	
	11	P12	30	28	14	



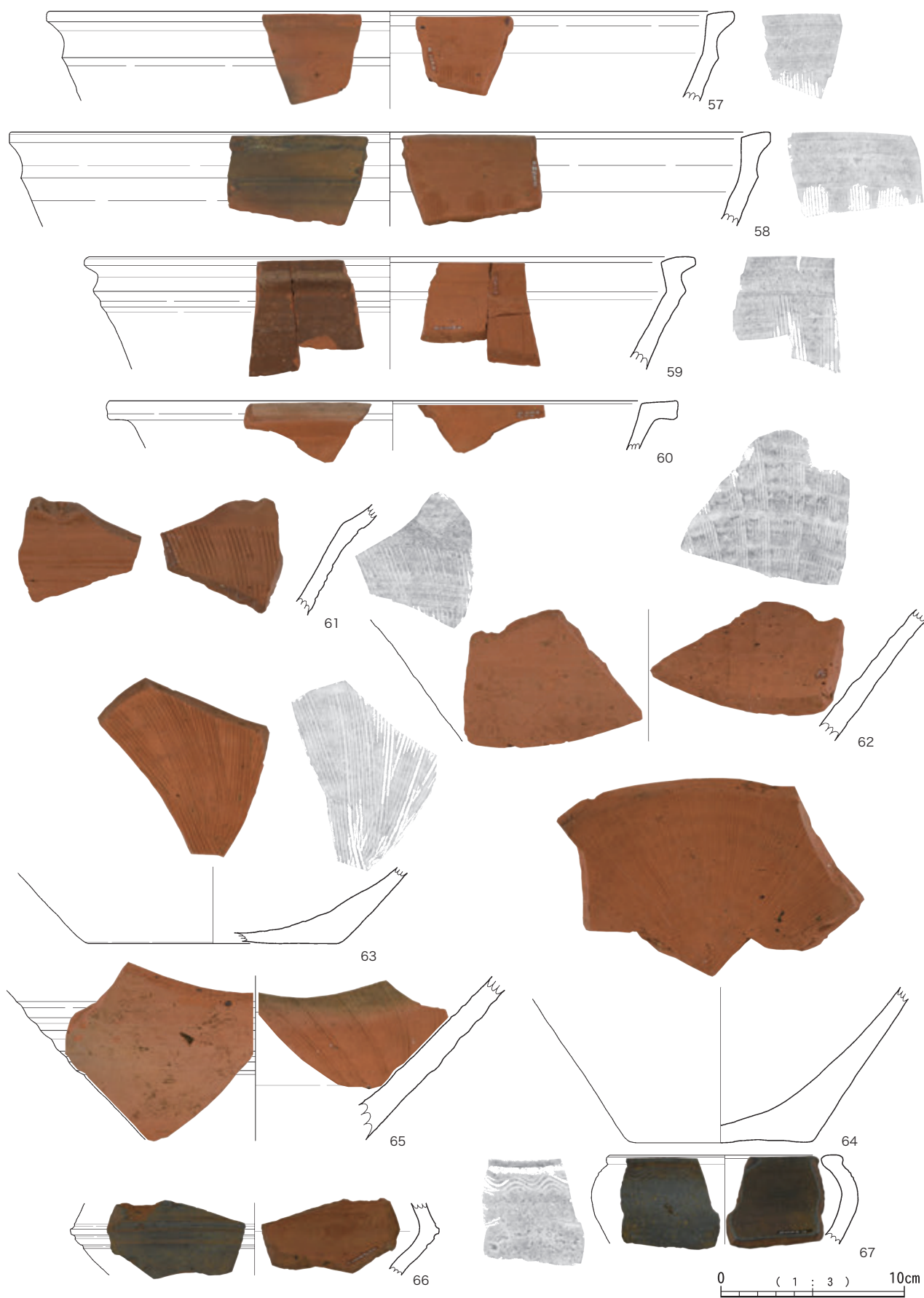
第9図 遺構内遺物1



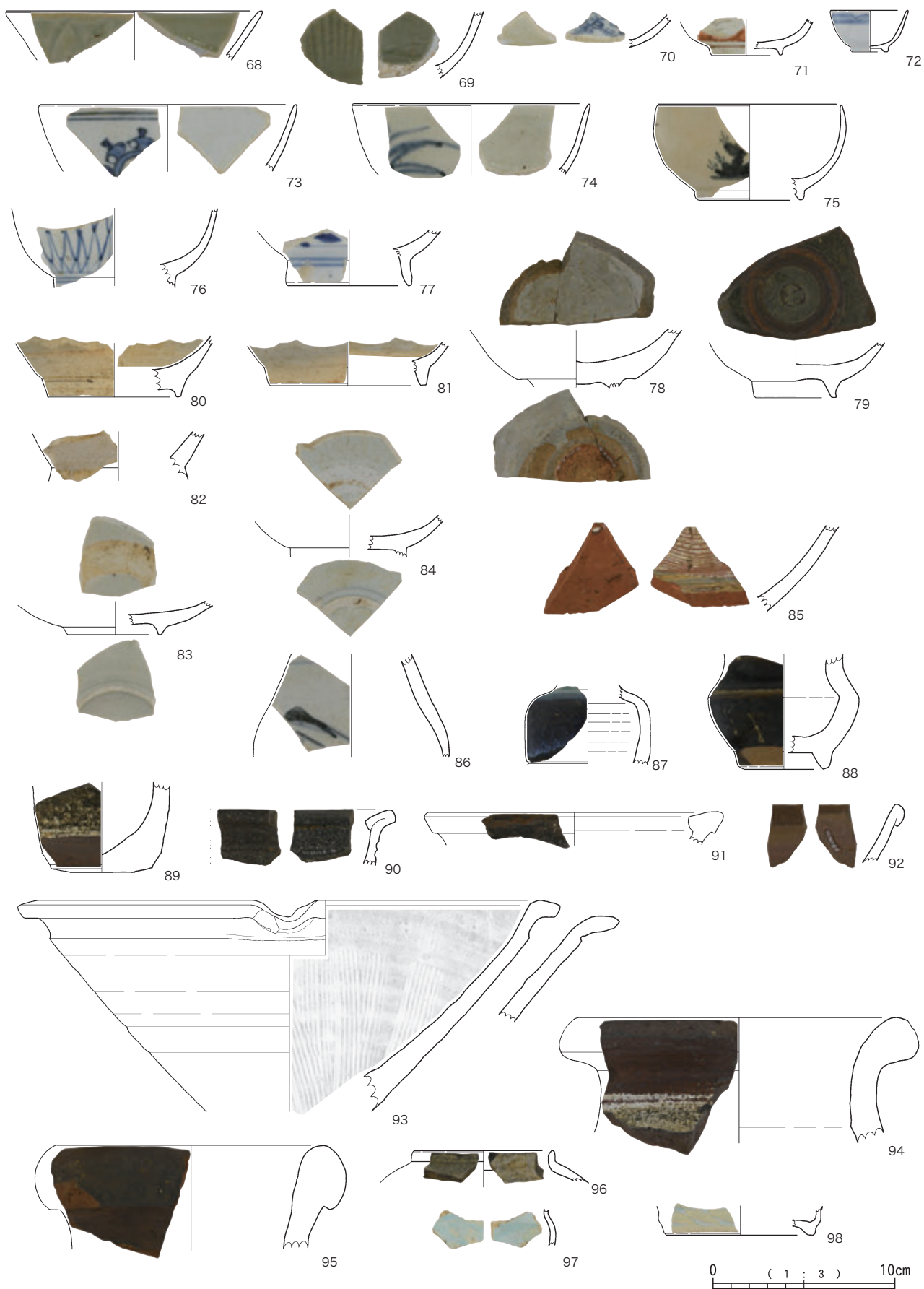
第 10 図 遺構内遺物 2



第 11 図 遺構内遺物 3



第 12 図 遺構内遺物 4



第13図 包含層・カクラン中の遺物

表5 遺物観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	区	層	取上番号	種別	器種	胎土の色調	産地	時代・時期	備考
9	1	NC-23・24	IV上	SD一括	青磁	碗	灰黄橙色	中国 龍泉窯系	15-16c	
	2	NC-23・24	IV上	SD. 18	青磁	碗	灰褐色	中国 龍泉窯系	15-16c	
	3	NB-24	III	SD一括	カムイヤキ	甕	赤茶褐色	カムイヤキ	15-16c	
	4	NC-23・24	IV上	SD一括	カムイヤキ	甕	赤茶褐色	カムイヤキ	15-16c	
	5	NC-23	III	SD一括	カムイヤキ	甕	赤茶褐色	カムイヤキ	15-16c	
	6	NC-23・24	IV上	SD. 19	陶器	壺	灰褐色	中国南部・東南アジア	15-16c	
	7	NB-24	III	SD一括	陶器	壺	黄灰褐色	中国南部・東南アジア	15-16c	
	8	NB-24	III	SD一括	陶器	壺	にぶい灰褐色	中国南部・東南アジア	15-16c	
	9	NC-23	IV上	SD一括	磁器	碗	灰褐色	肥前系	17c 前半	
	10	NB-24	III	SD一括	磁器	碗	灰褐色	肥前系	17c 前半	
	11	NC-23	III	SD一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	12	NB-24	III	SD一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	13	NB-24	III	SD一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	14	NB-23・24	III	SD一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	15	NB-24	III	SD一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	16	NC-23	-	SD一括	陶器	碗	暗褐色	肥前系	18c	
	17	NC-23	III	SD一括	陶器	碗	にぶい灰褐色	薩摩・加治木始良系	18-19c	
	18	NB-24	III	SD一括	陶器	碗	にぶい灰褐色	薩摩・加治木始良系	18-19c	
	19	NB-23・24	III	SD一括	陶器	碗	明茶褐色	薩摩・加治木始良系	18-19c	
		NB-24	III	SD一括						
	20	NA-24	III	SD一括	陶器	碗	灰褐色	沖縄	18-19c	
	21	NC-23・24	IV上	SD一括	陶器	碗	灰褐色	沖縄	18-19c	
	22	NA-24	III	SD一括	磁器	皿	灰褐色	肥前系	18c	
	23	NC-23・24	IV上	SD一括	磁器	皿	灰褐色	肥前系	18c	
	24	NC-23	III	SD一括	陶器	皿	灰褐色	薩摩・加治木始良系	18-19c	
	25	NC-23・24	IV上	SD一括	陶器	鉢	赤茶褐色	肥前系	18c	
		NC-23	III	SD一括						
		NB-24	III	SD一括						
	26	NC-23・24	IV上	SD. 16	陶器	鉢	赤茶褐色	肥前系	17c	
	27	NC-23・24	IV上	SD. 56	磁器	瓶	白灰褐色	肥前系	18c	
10	28	NB-23・24	III	SD一括	陶器	甕	暗紫褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	29	NC-23・24	IV上	SD. 15	陶器	甕	赤茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	30	NC-23	IV上	SD. 35	陶器	甕	暗紫褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	31	NC-23・24	IV上	SD一括	陶器	甕	灰茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	32	NB-24	III	SD一括	陶器	壺	暗紫褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	33	NB-24	III	SD一括	陶器	壺	茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	34	NC-23		SD一括	陶器	壺	にぶい茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	35	NC-23	III	SD一括	陶器	鉢	にぶい黄橙色	肥前系	18c	
	36	NC-23	IV上	SD. 40	陶器	甕	茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
		NB-24	III	SD一括						
	37	NB-24	III	SD一括	陶器	甕	茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	38	NA-24	III	SD一括	陶器	甕	茶褐色	薩摩・苗代川系	19c	
	39	NA-24	III	SD一括	陶器	甕	灰茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
	41	NB-23・24	III	SD一括	陶器	甕	明茶褐色	薩摩・苗代川系	18c	
		NC-23	III	SD一括						
11	42	NB-24	III	SD一括	陶器	甕	茶褐色	沖縄	18-19c	
		NC-23・24	IV上	SD. 12						
	44	NB-24	III	SD一括	陶器	壺	明茶褐色	沖縄	18-19c	
	45	NC-23・24	IV上	SD. 11	陶器	壺	茶褐色	沖縄	18-19c	
	46	NC-23・24	IV上	SD. 10	陶器	甕	暗紫茶褐色	沖縄	18-19c	
	47	NC-23	IV上	SD. 45	陶器	甕	暗茶褐色	沖縄	18-19c	
	48	NC-23	III	SD一括	陶器	壺	明茶褐色	沖縄	18-19c	

表6 遺物観察表(2)

挿図 番号	掲載 番号	区	層	取上番号	種別	器種	胎土の色調	産地	時代・時期	備考
11	49	NB-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	壺	暗紫茶褐色	沖縄	18-19c	
	50	NB-23・24	Ⅲ	SD 一括	陶器	土瓶	茶褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	51	NA-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	土瓶	灰茶褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	52	NA-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	土瓶	暗茶褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	53	NB-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	黄橙色	肥前系	18-19c	
	54	NB-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	黒褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	55	NC-23・24	Ⅳ上	SD. 28	陶器	すり鉢	暗茶褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	56	NC-23・24	Ⅳ上	SD 一括	陶器	すり鉢	茶褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
12	57	NC-23	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	明茶褐色	沖縄	18-19c	
	58	NC-23	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	59	NB-25	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	明茶褐色	沖縄	18-19c	
		NB-23・24	Ⅲ	SD 一括						
		NC-23・24	Ⅳ上	SD 一括						
	60	NC-23・24	Ⅳ上	SD. 59	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	61	-	-	SD 一括	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	62	NA-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	63	NC-23・24	Ⅳ上	SD. 27	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	64	NA-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	靱痕有
	65	NC-23・24	Ⅳ上	SD. 21	陶器	すり鉢	茶褐色	沖縄	18-19c	
	66	NC-23・24	Ⅳ上	SD. 14	陶器	その他	茶褐色	沖縄	近世	
13	67	NB-24	Ⅲ	SD 一括	陶器	その他	灰茶褐色	沖縄	近世	
	68	NA-24	Ⅲ	一括	青磁	碗	灰褐色	中国・龍泉窯	14-15c	
	69	NB-24	Ⅲ	一括	青磁	碗	灰褐色	中国・龍泉窯	15-16c	
	70	NC-23・24	カクラン		磁器	皿	灰褐色	中国・景德鎮窯	15c	
	71	NA-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	白灰褐色	中国・景德鎮窯	15c	
	72	NA-23	カクラン		磁器	小杯	白灰褐色	中国・景德鎮窯	15c	
	73	NB-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	17c	
	74	NB-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	17c	
	75	NA-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	にぶい黄橙色	肥前系	17c	
	76	NA-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	77	NA-24	Ⅲ	一括	磁器	碗	白灰褐色	肥前系	18c	
	78	NA-24, NB-24	Ⅲ	一括	陶器	碗	灰茶褐色	肥前系	17c	
	79	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	碗	暗紫茶褐色	薩摩・加治木始良系	18c	
	80	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	碗	黄橙色	沖縄	18-19c	
	81	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	碗	黄橙色	沖縄	18-19c	
	82	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	碗	黄橙色	沖縄	18-19c	
	83	NB-24	Ⅲ	一括	磁器	皿	灰白褐色	肥前系	18-19c	
	84	NA-24	Ⅲ	一括	磁器	皿	灰白褐色	肥前系	18-19c	
	85	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	鉢	赤茶褐色	肥前系	17-18c	
	86	NB-24	Ⅲ	一括	磁器	瓶	灰白褐色	肥前系	18c	
	87	NA-24	表土	-	陶器	瓶	にぶい黄橙色	沖縄	18c	
	88	ND-23	Ⅳ上	32	陶器	瓶	にぶい黄橙色	沖縄	18c	
	89	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	壺	灰褐色	沖縄	18-19c	
	90	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	鉢	灰褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	91	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	鉢	灰褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	92	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	すり鉢	茶褐色	肥前系	18-19c	
	93	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	すり鉢	赤茶褐色	沖縄	18-19c	
	94	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	壺	暗紫褐色	沖縄	18-19c	
	95	NB-24	Ⅲ	一括	陶器	壺	暗赤茶褐色	沖縄	18-19c	
	96	NA-24	Ⅲ	一括	陶器	土瓶	灰褐色	薩摩・苗代川系	18-19c	
	97	NC-23・24	カクラン		陶器	不明	白黄褐色	不明	近世・近代	
	98	ND-23・24	Ⅲ	一括	陶器	不明	白黄褐色	不明	近世・近代	

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構

遺構は、近現代のカクランや、配管等の埋設状況により調査区の多くの部分で十分に検出出来なかった。調査の結果、町教委A調査区に近い北側で比較的良好に残っていた。

土坑は5基検出された。概ね円形プランを呈しており、2～5号は近接して1間×1間の建物を構成しているようにも見える。だが、検出面から床面までの深さが2号土坑では5cmと、上面が削平されており詳細を明らかにすることは出来なかった。このため、土坑として報告したが、町教委実施のB地区に同様の遺構が検出されている（天城町2013）。これらは、検出面からの深さが深く、遺構間の距離は1×2m程度の規模で、柱穴の径が1mあるものも見られる。これらは、類似する遺構として、和泊町根皿原遺跡の掘立柱建物跡2～5号がある（和泊町2009）。柱穴の径は、50～70cmあり、深さは70cm程度あるものもある。規模は2×3mで、当遺跡の配置と比較して若干規模が大きい。青磁碗やグスク土器、カムイヤキ等が出土しており、報告書では、高倉との類似性を指摘しつつも、現存する高倉が柱穴を掘らずに敷石を据えて柱を設置している点に差異が認められることを指摘している。今回、4基の土坑としたものが、建物を構成する遺構となるのか、今後の調査事例の増加を待って検討していく必要がある。

柱穴は11基が確認された。天城町調査区においても多数が検出されており、本来は、複数の時期に建物跡が存在していたことが窺える。特に、今回の調査範囲においては南側の高い調査区より北側の低い調査区の方が検出数も多く、土地利用の差があったようでもある。各柱穴からは柱痕跡や根石等は見つかっていないため、どの程度の規模の建物であったかははっきりとしない。

溝状遺構は、南側から北側へ緩やかに傾斜して検出された。その延長に石垣があり、後述するが近現代まで使用されていたことを考えると、この溝状遺構も時期的に同じような状況が考えられる。

遺構内遺物は、多くが攪乱された状態で出土しており、接合作業を実施しても全体器形を復元できた資料は少ない。だが、破片の摩滅状態はそれほど高くなく、比較的近隣からの流れ込みが予想される。これらは、遺構内遺物として一括資料とはなり得ないが、近世を中心に多種多様な遺物が出土している。

石垣については、下部構造や背面の状況を確認することが出来た。まず、基礎部分は地山を削り、方形に整えた切石を平積みしている。次に、背面からは土砂を充填させる単純な構造で、裏込め石等は確認できなかった。

なお、現在市道に接する側道部分にこの延長は延びており、調査中に付近の住民へ聞き取りを行ったところ、昭和中期まで溝と石垣の間にある水溜状の窪地があり、利用していたとの情報が得られたため、それ以降、現道下に埋められたものと判断した。ただし、石垣がいつの時代に構築されたのかは不明である。

第2節 遺物

カクランや表層中の遺物も含め、411点が出土している。多くは小破片で、器形が不明な資料が目立つ。

中世該当資料として、少ないながらも青磁が出土している。町教委発掘調査地点からは当該期の資料が中心に出土していることを考えると、中世の中心は町教委調査区の北側にあったことがうかがえる。詳細な時期を示す資料として、鎬蓮弁文の幅が広いものや線描蓮弁文の破片が出土していることから、今回の調査区周辺において14世紀から16世紀にかけての営みがあり、その縁辺部であったと評価したい。また、東南アジアや中国産の陶磁器も出土しており、注目される。

近世は、溝内出土資料などから碗や皿などの食膳具が出土している。主な産地は、肥前、薩摩、沖縄と幅広い産地からのもので構成されている。甕や壺の大型品は、薩摩産とするには胎土や色調にやや違和感を覚えるものがあるが、どちらかというと薩摩産が多い。その一方、すり鉢は沖縄産が多く出土しており、複数個体が確認できた。すり鉢の目は、57のように間隔のあるものもあれば、64のように比較的密接しているものもあり、時期幅と思われる傾向が確認できる。L字状口縁を作出する資料が多い中で、粘土を折り返して口縁部に縁帯を作出する資料も見られた。

渡辺芳郎氏は、奄美大熊大里遺跡出土の陶磁器を産地・種類・器種ごとに改めて検討して破片数を元に奄美における近世陶磁器の流通を検討している。食膳具においては、陶器では肥前産の流通が「18世紀中頃には肥前陶器が食膳具市場から撤退するため、出土がなくなる。ついで薩摩焼では、加治木・始良地区で生産された食膳陶器」が「肥前の食膳陶器の欠を埋める形で流通したと考えられる」と述べ、土瓶は「苗代川産が18世紀後半以後に数多く流通している」とした（渡辺2021）。貯蔵具では、薩摩産と沖縄産とがある点を指摘した上で、「薩摩産では苗代川産が圧倒的多数を占める」とした。沖縄産荒焼大壺なども一定数を占めるが（中略）その流通は18世紀以後と考えられ、近代のものも含む可能性」に言及した。調理具では、「薩摩の摺鉢はすべてが苗代川産で、近世を通じて流通していた。沖縄荒焼の

摺鉢も見られるが、貯蔵具と同様、近世と近代との判別が難しい」と述べている。

当遺跡出土の陶磁器について、遺構内も含めた破片数をまとめたものが表7である。「甕・壺類の比率の高さは、本体がもともと大型であるため、破損時の破片数は多くなる傾向」という渡辺氏の指摘（渡辺 2021）に留意して見ていく必要がある。食膳具陶器では、加治木・始良系が比較的まとまっており、わずかに5点堅野系が確認出来た。貯蔵具においては、苗代川産の甕・壺・鉢が多く、次いで沖縄産が多い。調理具では、すり鉢は沖縄産が多く、次いで苗代川産があり、わずかに肥前系が見られた。これらの点は、詳細な時期の検討が出来なかったが、概ね渡辺氏の指摘する傾向に一致しており、徳之島においても、この傾向が追認できるものと思われる。だが、食膳具陶器において、当遺跡からは沖縄産施釉陶器がある程度まとまっていることから、奄美諸島を沖縄に向けて南下するにしたがい、この傾向は大きくなる可能性も含んでいる。この点に関して、北野勘重郎氏は、和泊町根皿原遺跡において、「近世陶磁器の器種で最も多いのが碗などの食器類で、続いて甕・壺類などであった」点を挙げ、「本土産陶磁器と沖縄産焼物（陶器・陶質土器・瓦質土器）の総点数の割合が約5対6であることは、生産地からの距離を反映するものか、または藩政下に沖永良部島の置かれた状況を映し出すものであろうか」と述べている（北野 2009）。徳之島より南下した沖永良部島においては、沖縄産陶器の割合が高くなる傾向が予想され、中組遺跡の産地別陶磁器比率は北野

氏の述べる「生産地からの距離」がある程度反映されていることを示唆するものと思われる。

なお、これらは近世・近代の遺物であり、表土中とも理解される上層の調査において、意識して遺物を調査しなければ得られにくい情報でもある。このことは、奄美地区の調査において今後より一層留意していく必要があろう。

今回の調査では、中世の遺物が少なく、中世における中組遺跡の中心は、町教委調査区周辺にあったことが考えられ、今回実施の調査区はその周辺部であった可能性がある。今回報告の中心となった近世・近代の遺物に関しては、町教委調査区においても一定数出土しており、近世以降集落が南側の高い地点にまで拡大していった可能性が考えられ、遺構等の状況から、これらは近代から現代にかけて存続していたと考えられる。

なお、報告書作成に際し、大橋康二氏、宮城弘樹氏よりご助言を賜った。

【引用・参考文献】

- 天城町教育委員会 2013『中組遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 北野勘重郎 2009「第VI章まとめ」『根皿原遺跡』和泊町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）和泊町教育委員会
- 宮城弘樹 2022『琉球の考古学』敬文舎
- 渡辺芳郎 2021「第4章 奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査」『近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究』

表7 遺物組成表

	磁器					陶器									小計	割合
	青磁	中国	肥前	薩摩	不明	カムイヤキ	肥前	苗代川	加治木始良	堅野	沖縄	備前	中国南部 東南アジア	不明		
碗	15	4	76		31		10		37	4	19			25	221	24.2%
皿		1	18		3		1		1					1	25	2.7%
小杯		1													1	0.1%
徳利・瓶			12		4		1		3		2				22	2.4%
土瓶蓋								5		1					6	0.7%
土瓶身								11							11	1.2%
鉢			1				21	4							26	2.8%
甕						15		138			96		2	73	324	35.4%
壺							1	5			18		6		30	3.3%
すり鉢							4	13			30	1		2	50	5.5%
その他					71						2			125	198	21.7%
小計	15	6	107	0	109	15	38	176	41	5	167	1	8	226	914	100.0%
割合	1.6%	0.7%	11.7%	0.0%	11.9%	1.6%	4.2%	19.3%	4.5%	0.5%	18.3%	0.1%	0.9%	24.7%	100.0%	100.0%

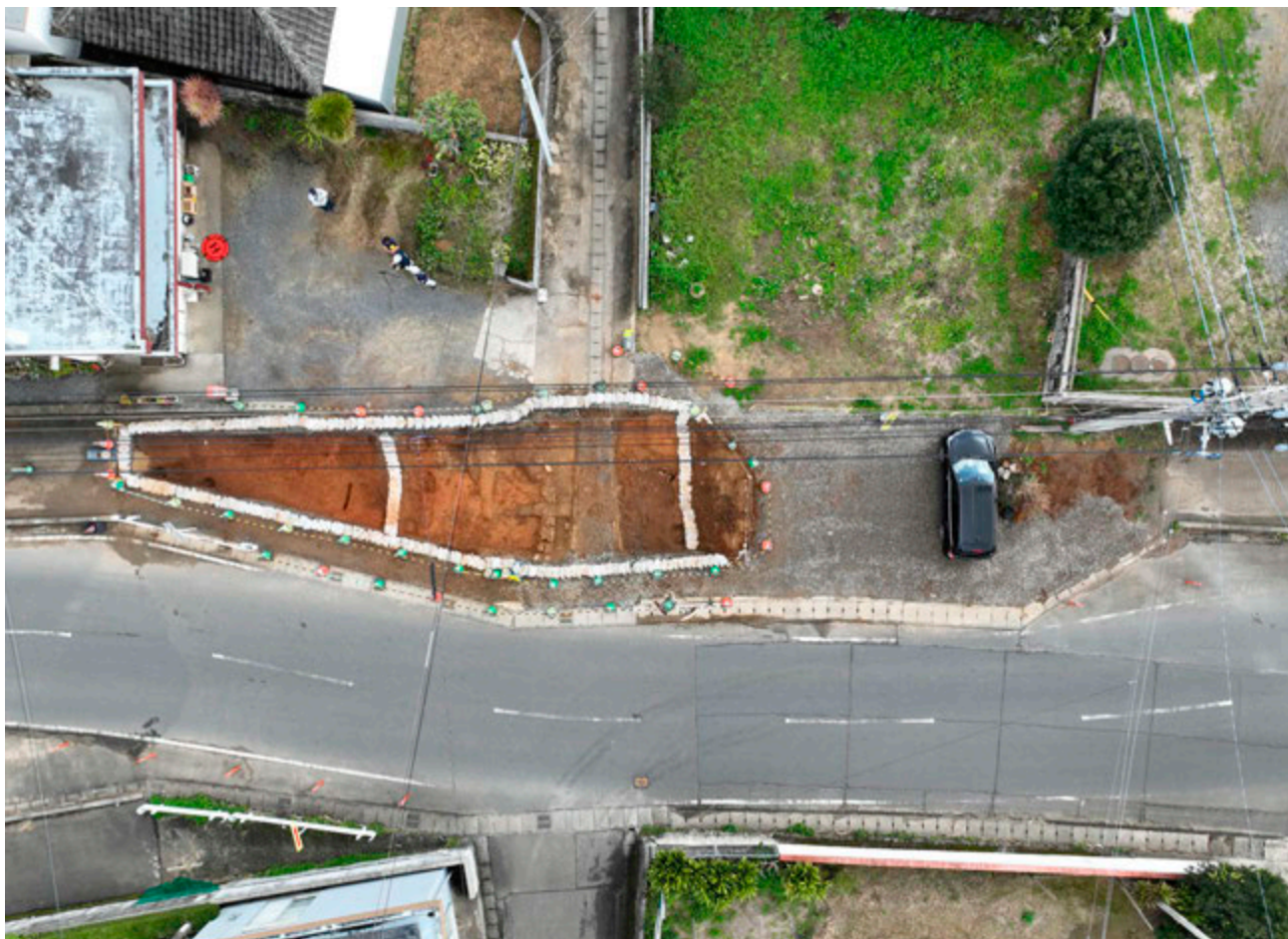
写真図版



①空撮（東から西を見る）



②空撮（西から東を見る）



①空撮（調査区全景）



②南側完掘状況



③北側完掘状況



①調査区南側土層断面



②調査区西側土層断面



①作業風景 1



②作業風景 2



③作業風景 3



④作業風景 4



①石垣検出状況 1



②石垣検出状況 2



③石垣検出状況 3



④溝状遺構調査状況 1



⑤溝状遺構調査状況 2



⑥溝状遺構埋土状況



① 1号土坑完掘状况



② 2号土坑半截状况



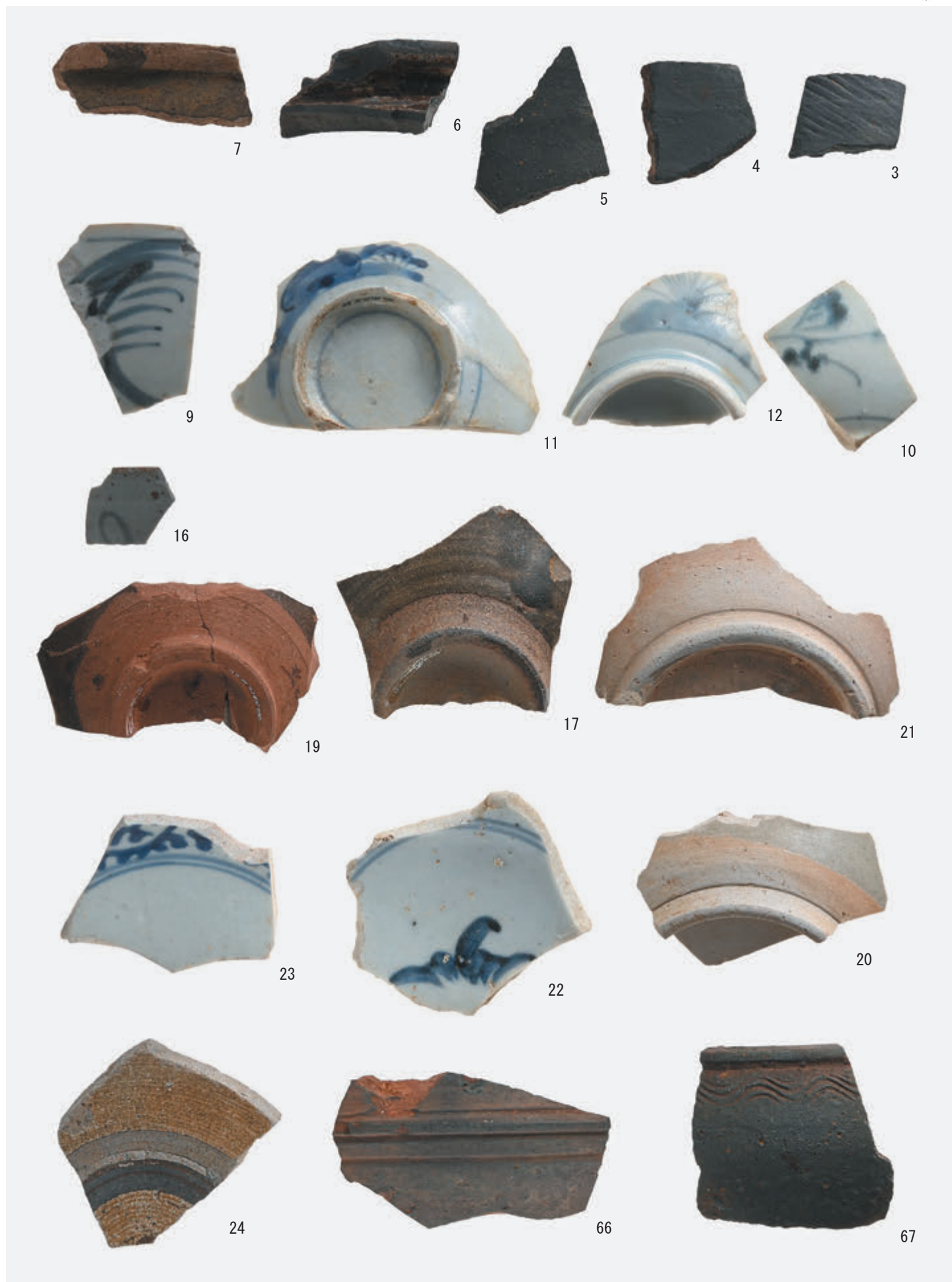
③ 3号土坑半截状况



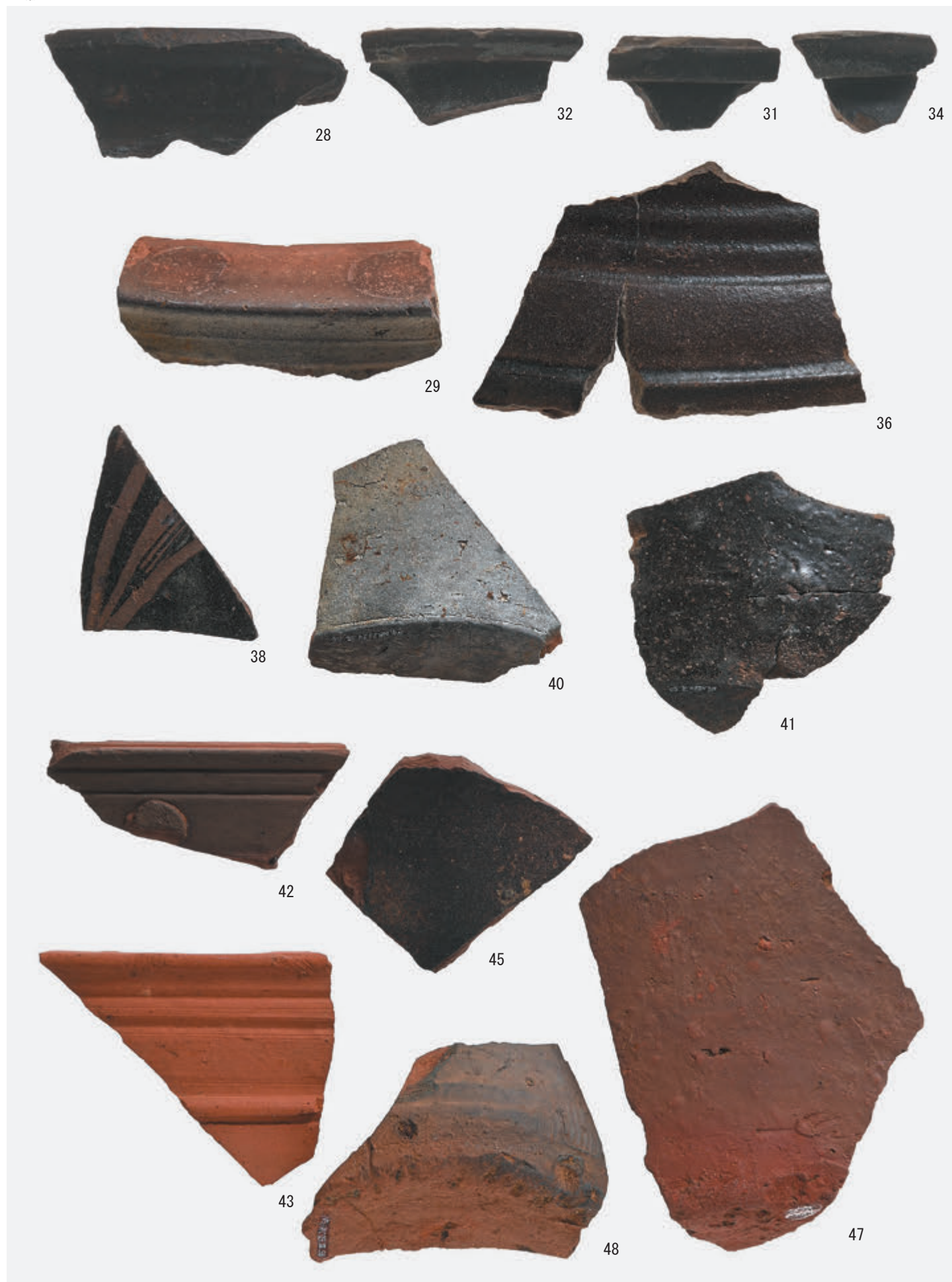
④ 4号土坑完掘状况



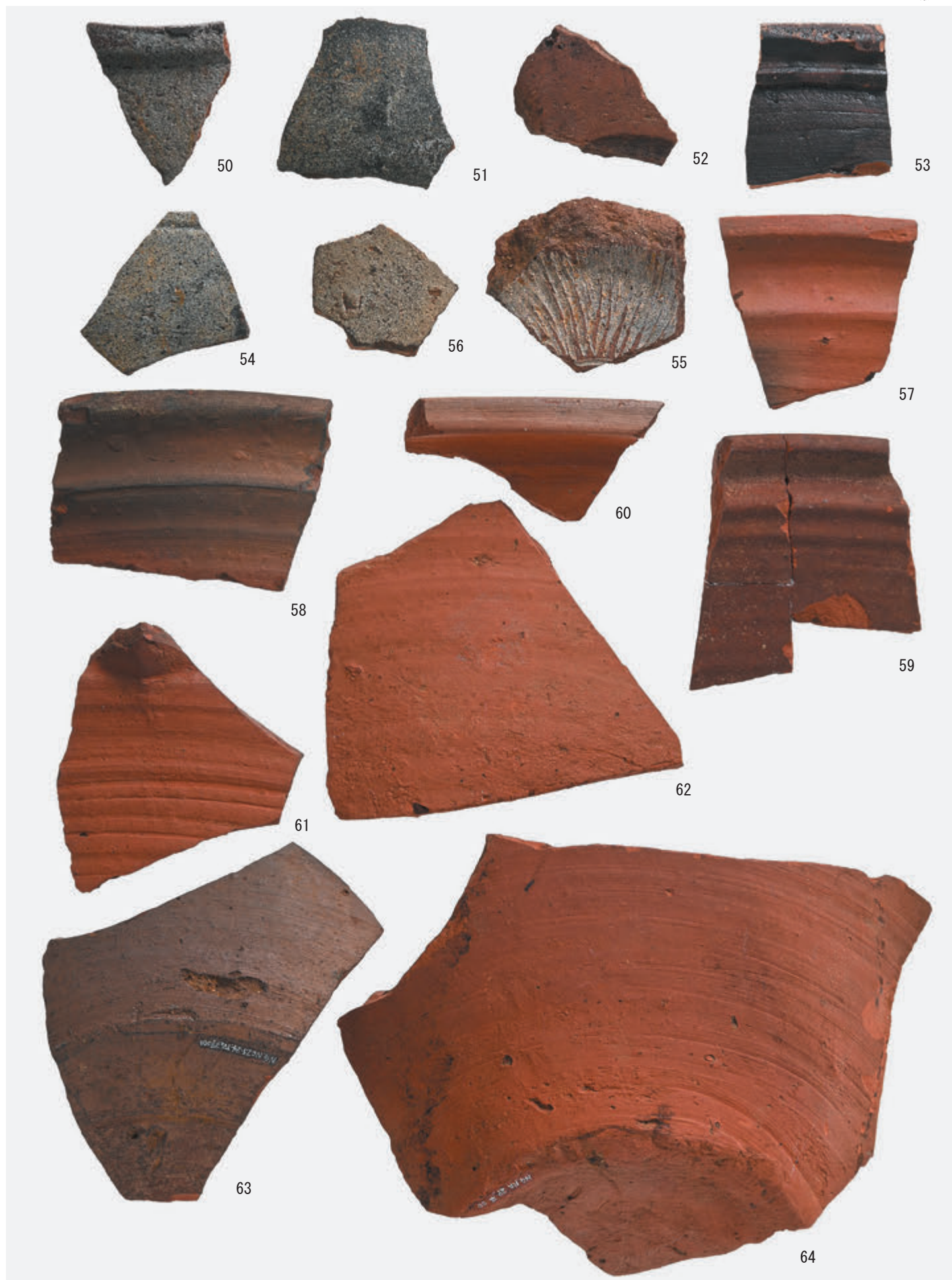
⑤ 2·4·5号土坑完掘状况



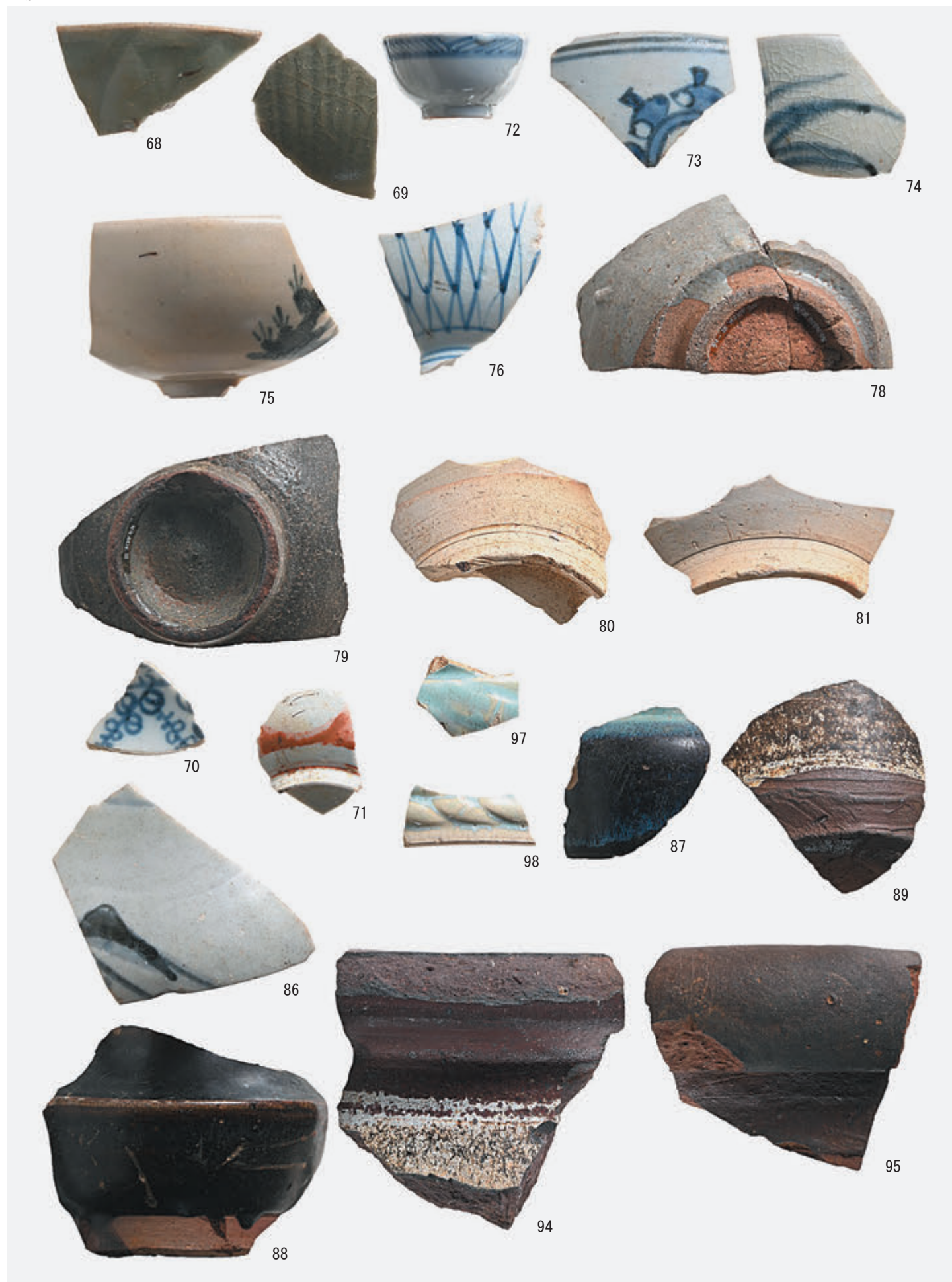
遺物 1



遺物 2



遺物 3



遺物 4

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（230）

伊仙天城線真瀬名工区道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中組遺跡（大島郡天城町）

発行年月日	2025年3月
編集・発行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1 TEL 0995-48-5811
印刷	株式会社 あすなろ印刷 〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36 TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758



鹿児島県